

VIEWnext

先生方と共に創る 教育情報&オピニオン誌

[ビューネクスト] 高校版

2024

8

August

特集

学びに向かう力、エージェンシー、非認知能力……

なぜ育む？「見えない力」

茨城県立
表紙の学校
境高校



今号の掲載校

群馬県立高崎女子高校 / 群馬県立前橋南高校 / 石川県立金沢泉丘高校 / 岡山県立岡山東商業高校 /
大分県立日田高校 / 栃木県・私立宇都宮文星女子高校 / 兵庫県・私立雲雀丘学園中学校・高校 /
神奈川県立横浜緑ヶ丘高校 / 千葉県立千葉北高校 / 大阪府・私立常翔学園中学校・高校

先生なら、 どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

「合格する可能性が
高いのは、この大学だよ」
何気なく答えた事実が
生徒の進路を大きく変えた

公立・T高校
Y先生

進学校での勤務が長く、データに基づいた納得感のある進路指導を追求してきた。管理職となった現在は、キャリアの多様な教師が連携し、組織として指導力を向上させることができる学校づくりに注力している。



「東 大と京大、どちらが合格しやすいですか」。センター試験の自己採点が終わった日、女子生徒のAさんが、彼女の担任ではなかった私に声をかけてきました。その時の3年生には、東京大学を志望する生徒がAさんを始め数人いました。Aさんのセンター試験の結果と、両大学の個別学力検査で課される科目・配点などを確認した私は、「今のAさんが合格する可能性が高いのは、京都大学だよ」と、理由とともに説明しました。それを聞いたAさんは、納得した表情をしていました。

数日後、職員室でAさんの担任が、小声で私に話しかけてきました。「Aさんが今日の三者面談で、東京大学に気持ちが向かないと言いつつ出したんだ」。丁寧な面談を通じて、生徒一人ひとりに自信や高い志望を持たせていたその担任は、私にとっては、互いのクラスの生徒の小さな成長も喜び合える、よき同僚でした。彼の言葉を聞いた時、嫌な予感がしました。そして、その予感は当たってしまいました。「『京都大学の方が確実だ』って、Y先生からアドバイスされたと言っていたんだけど……」。

質問されたことに答えただけのつもりが、Aさんに想像以上に大きな影響を与えてしまった。自分の言葉の重みに気づかなかったことを、私は後悔しました。データに基づいた事実を伝えた後、Aさんに「担任の先生としっかり話してね」と言っておけば、担任に「Aさんにこんな話をしました」と伝えておけば、Aさんの将来の夢や学力を熟知する担任は、それまでの面談の内容などを踏まえて、Aさんが心から納得する出願に導いたはずでした。Aさんからの質問に答えを差し出すことだけしかしなかった自分の安易な言動に戸惑うばかりで、私は言葉が出ませんでした。Aさんが京都大学に合格した後、私は改めて担任に謝罪しました。担任は、「無事に合格したのだから……」とってくれましたが、私の心は一向に晴れませんでした。

数年後、異動先の学校の職員室で、ある若手の教師が、数部活動でかかわりのある3年生に「この大学の方が合格しやすい」と説明する姿を目にしました。話が終わり、生徒が職員室を後にしたことを確認した私は、「担任のいないところで話を進めては駄目だ」と注意しました。普段と違う私の口調に驚く若手に、私は過去の失敗を打ち明けました。そして、「生徒と何を話したのか、担任に共有してください」と頼みました。

20年以上も前ですが、今でもあの失敗を思い出すと、Aさんにも担任にも申し訳なく、私は胸が苦しくなります。

「教師の言葉が生徒にどれだけの影響を与えるのかが分かっていなかった」と、自分の失敗を振り返ったY先生が、今の自分ならどうするかを語ったウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。



<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article28816/>

巻頭 先生なら、どうしますか？

「合格する可能性が高いのは、この大学だよ」
何気なく答えた事実が生徒の進路を大きく変えた
公立・T高校 Y先生

2 特集

学びに向かう力、エージェンシー、非認知能力……

なぜ育む？「見えない力」

4 Interview 「見えない力」が注目されている理由、育成のポイント 岡山大学教育推進機構 准教授 中山芳一

8 Case1 エージェンシーを共通キーワードに育む 群馬県教育委員会
実践例 群馬県立高崎女子高校 / 群馬県立前橋南高校

16 Case2 探究学習を通じて育む 石川県立金沢泉丘高校 いずみがわか

19 Case3 振り返りの充実を通じて育む 岡山県立岡山東商業高校

22 Case4 教科を超えて育む 大分県立日田高校 ひた

25 Commentary 社会で求められる「見えない力」 パーソル総合研究所 上席主任研究員 小林祐児

28 発問・課題設定をキーに見る
主体的・対話的で深い学び 授業実践

28 日本史
栃木県・私立宇都宮文星女子高校 篠原孝文

32 情報 ひばりがわか
兵庫県・私立雲雀丘学園中学校・高校 林 宏樹
お勧めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

36 探究学習 つながり、伴走する教師たち
神奈川県立横浜緑ヶ丘高校
テーマ 探究×企業
お勧めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

38 事例で深める！ 学習評価 **新連載**
千葉県立千葉北高校
テーマ 評価規準の設定
お勧めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

40 指導変革の軌跡
大阪府・私立常翔学園中学校・高校
学校改革
お勧めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

44 大学入試トレンド解説
目前に迫る2025年度大学入試に向けた
進路指導と学習指導のポイント
お勧めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

52 Reader's VIEW

<https://view-next.benesse.jp/>

本誌記事は、ウェブサイトVIEWnext ONLINEでもご覧いただけます。

印刷製本／(株)協同プレス 編集協力／(有)ベンダコ 執筆協力／二宮良太 撮影協力／荒川 潤、岸 隆子、谷口 哲、ヤマグチイッキ イラスト協力／カモ

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。

※本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。 ©Benesse Corporation 2024

学びに向かう力、エージェンシー、非認知能力……

なぜ育む？「見えない力」

現在の学習指導要領において、教育の目

標として整理された資質・能力の3つの柱の1つに、「学びに向かう力、人間性等」があります。また、OECDが提唱する「The OECD Learning Compass 2030」の中心的な概念として、「エージェンシー」が位置づけられています。そして、「非認知能力」と言われるものの重要性が昨今、社会で衆目を集めています。それらの資質・能力は、客観的に評価・測定することが難しく、その資質・能力の育成・評価に苦慮されている先生方は少なくありません。そこで今号では、「学びに向かう力」「エージェンシー」「非認知能力」などの資質・能力を「見えない力」と総称し、それはどうすれば育成・評価できるのか、そもそも「見えない力」を育成する意義は何なのか、考えてまいります。

VIEWnext編集部 統括責任者 柏木 崇

現代社会が注目する「見えない力」

「学びに向かう力、人間性等」

主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等で、自分の思考や行動を客観的に把握し認識する、いわゆる「メタ認知」にかかわる力を含む。また、多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなどの人間性等に関するものも幅広く含む。

「エージェンシー」

OECD（経済協力開発機構）は、よりよい社会を実現するために求められる学びの枠組みとして、「The OECD Learning Compass 2030」を策定。「自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく力」を、子どもたちへの育成を目指す資質・能力として定義し、それらを育む学習過程として、「見通し・行動・振り返り」のサイクルを示した。そのサイクルを回していく原動力として、「自ら考え、主体的に行動する資質・能力」といった意味の「エージェンシー」を位置づけた。

「非認知能力」

知能検査や学力テストなどで測定される、数値で表せる能力を「認知能力」と言うのに対し、自制心や誠実性、好奇心や協調性など、情緒や社会性に関する、数値で表しにくい能力を「非認知能力」と言う。（P.7では、ベネッセ教育総合研究所研究員が解説）

「見えない力」の育成・評価に関する現場の課題感

- 知識・技能の習得を優先すべきという考えの教師も少なくなく、「見えない力」の重要性の理解が十分ではない。
- 数値化されない「見えない力」は、生徒にとってどのような力で、その力は、将来何の役に立つのかを理解させる仕掛けが非常に重要だと思う。
- 「見えない力」の育成・評価にはマニュアルがないため、それぞれの教師に委ねられるところが大きく、教師間で共通認識しにくい点が課題だ。
- 「見えない力」は、身についたかどうかが見えにくく、また、一見身につけているようでも、真の力として定着しているかどうかを見極めるのが難しい。

先生方とともに考えたい「問い」

「見えない力」を生徒に
育む意義とは何か。
「見えない力」は、
どうすれば
育成・評価できるのか。

現場の教師に、「学びに向かう力、人間性等」を始めとする「見えない力」の育成・評価に関する課題感を聞くと、「多くの教師が、授業で注力すべきは知識・技能の習得だと認識している」「生徒は、ペーパーテストの成績だけに関心を向けている」といった声が上がリ、「見えない力」の重要性の理解は、教師、生徒ともに十分とは言えないのが現状だ。また、「見えない力」をどのように育み、見取っていくのかについても、「個々の教師の経験や教育観に委ねられている」「真の力として身についたものか、その場限りのものかを見極めるのが困難」などの声が聞かれ、「見えない力」の育成や評価に苦慮している現場の状況がつかえる。

P.4 Interview

「見えない力」を言語化すると、生徒の意識や行動が変わる
岡山大学教育推進機構 准教授 中山芳一

P.8 Case 1

「エージェンシー」をキーワードに、
自ら考え、判断し、行動できる生徒を育む
群馬県教育委員会

実践例 ● 群馬県立高崎女子高校

全教師で自校のあり方を議論し、活動の目的を共有。
生徒の「自立」を組織的に支援する

実践例 ● 群馬県立前橋南高校

生徒の活躍などを伝えるジャーナルを毎週発刊。
エージェンシーとは何かを全校に浸透させる

P.16 Case 2

ロールモデルを身近に感じさせる探究学習で、
「実行力」「自走する力」を育む
石川県立金沢泉丘高校

P.19 Case 3

日々の振り返りの充実によって、
社会で求められる非認知能力を育む
岡山県立岡山東商業高校

P.22 Case 4

教科を超えて多様な資質・能力を育み、
評価する仕組みをつくる
大分県立日田高校

P.25 Commentary

社会で求められる「見えない力」とは。
企業ではどのように育成・評価しているのか
パーソル総合研究所 上席主任研究員 小林祐児

「見えない力」を言語化すると、 生徒の意識や行動が変わる

岡山大学教育推進機構 准教授 **中山芳一**

なぜ今、「見えない力」が注目されているのか。「見えない力」を生徒に育むために、学校にはどのような指導・支援が求められるのだろうか。自制心や、やり抜く力などの「見えない力」に関する著書を多く出版し、その育成のための教育の重要性を積極的に発信している岡山大学教育推進機構の中山芳一准教授に聞いた。

「見えない力」が注目されている理由

「見えない力」は
思考・行動として「見える」

現行の学習指導要領で整理された資質・能力の3つの柱のうち、「学びに向かう力、人間性等」の育成や評価で苦労されている先生方は多いと思います。その要因の1つは、そうした資質・能力は、客観的に測ることが難しい「見えない力」だからです。

多くの学校では、グラデュエーション・ポリシー（以下、GP）に、「リ

ーダーシップ」や「問題解決能力」などを掲げていますが、そうした資質・能力もまさに「見えない力」です。「見えない力」であるからこそ、「GPとして定めた資質・能力を、日々の教育活動で育むことができているか？」と問われた時、「育むことができている」と明言することができない教師が少なくないのは当然のことだと言えます。知識・技能の習得状況は、ペーパーテストで客観的に評価することができます。ところが「見えない力」は、ど

なかやま・よしかず 岡山大学教育学部を卒業後、学童保育の指導員に。その後、岡山大学大学院教育学研究科へ進み、教育方法を専攻。岡山大学では、キャリア教育や課外活動支援を担当するとともに、非認知能力を育成するための教育実践の重要性を積極的に発信し、小・中学校、高校、幼稚園、保育園の教育活動の組織的改善にも取り組む。著書に、『教師のための「非認知能力」の育て方』（明治図書出版）、『家庭、学校、職場で生かせる！ 自分と相手の非認知能力を伸ばすコツ』（東京書籍）など。



なぜ育む? 「見えない力」

の程度身についているかが客観的に捉えづらいものです。上限を定めることはできず、「満点」という概念がないため、「この生徒の粘り強さは100点満点中85点だ」などといった形で点数をつけることもできません。

「見えない力」は、人がどのように考え、行動するかによって、その力をどの程度有しているかが分かります。例えば、場の雰囲気や和ませることができると生徒は、「コミュニケーション能力が高いと評価することができません。しかし、「見えない力」の評価は、状況や場面に依拠します。同じ発言でも、状況によっては、「周囲の心情を慮れない」などと、むしろ「コミュニケーション能力が低いと評価されてしまいます。また、親しい仲間がいるクラスでは場を和ませることができけれども、地域の人たちなど、初めて会う人がいる場では態度が一変するようでは、「コミュニケーション能力が高いと評価することはできないでしょう」。

つまり、状況や場面に応じて、一定のパフォーマンスを発揮することができて初めて、そうした力を有しているとは評価できるわけです。そのため、多様な年齢、立場の人たちと多様な教育活動をする学校であればあるほど、「見えない力」が見える機会が多いのでは

ないでしょうか。

社会の変化を受けて「見えない力」が重要に

「見えない力」の育成は、これまでの日本の学校教育でも大切にされてきました。そして、その重要性は、社会の変化とともにますます高まっています。

その背景の1つが、テクノロジーの進化です。私は「学びに向かう力、人間性等」は「コンピュータのOS（オペレーティングシステム）であり、「思考力、判断力、表現力等」はCPU（中央演算処理装置）であると考えています。生成AIの登場などにより、私たちは大量で多様な情報を比較・分析し、適切に判断することが求められるようになってきています。そこで機能するのが「思考力、判断力、表現力等」というCPUです。そして、よりよい納得解を探し続けることも求められています。そこで機能するのが「学びに向かう力、人間性等」というOSです。グローバル化が進展し、多様な価値観を持つ人たちとともに、地球規模の課題に向き合う必要性が高まっていることも、CPU、OSの性能の向上が求められている要因になっています。

「見えない力」の育成のポイント

具体的な行動指標として「見えない力」を言語化

多くの学校では、「見えない力」の育成を校訓などで掲げていますし、近年はGPとして、「見えない力」の育成を標榜する学校も増えています。しかし、教育目標として掲げてはいるものの、それが具体的な教育活動の変化・充実につながっている実感が持てず、「絵に描いた餅で終わっていて、育成・評価できていない」と感じている教師も少なくないようです。

それは、「見えない力」が見えないままになっていることが原因なのだと思います。「見えない力」は見える化することで、育成・評価することができるようになるのです。

例えば、「レジリエンスを育成する」というGPがあると思います。教師は授業など、様々な機会ですべてに「困難に直面しても、乗り越えていこう」となどと訴えます。しかし、そのようなメッセージだけでは、見える化は十分とは言えません。

そこで教師間で、「生徒がレジリエンスを発揮した場面と、その時の生徒

の姿はどのようなものだったか」を振り返り、言語化していきます。教科の授業や探究学習、特別活動など、様々な場面での生徒の姿を具体的に描写していくことで、「自校の生徒ならではのレジリエンスを発揮する時の姿」が見えてきます。そして、「困難に直面した時に、臆することなくOSを出し、他者の支援を受けながら、状況を少しずつ改善できること。また、そうしたことを喜びと感ぜられること」などと言語化し、それを生徒に伝えていくことで、GPが「自分もそうになりたい」といった行動指標となります。

行動指標があることで、教師は「生徒は困った時に周囲に助けを求めているか」「ちょっとした改善を成果として自覚できているか」などと、生徒を支援する要所を理解することができまします。また、教育活動の中に、「見えない力」を発揮する場面を意図的につくりやすくもなるはずです。

メタ認知によって自ら

「見えない力」を評価する

生徒に「自分もそうになりたい」とい



った具体的な行動指標が浸透すると、生徒は自分の行動のモニタリング(自己認識)と、コントロール(自己調整)が可能になります。つまり、ルーブリックなどを基にした日々の振り返りによって、行動指標の到達度をモニタリングし、目標との間にズレがあった場合は修正するなどのコントロールを行うこととなります。

「見えない力」のモニタリングと

ントロールには、メタ認知の力が欠かせません。「メタ」は「超越した」「高次の」という意味で、メタ認知は、今の自分をもつ一人の自分が客観的・俯瞰的に見ることです。

人は、メタ認知の力を働かせることで、体験したことに自分なりの意味づけをすることが出来ます。「いつ、何をしたか」という活動の記録にとどまることなく、その活動は自分にとってどんな意味や価値のある経験だったのかをモニタリングすることで、「次はこうしてみよう」などと自分をコントロールすることが出来ます。そうして、「見えない力」を伸ばしていくのです。

生徒がメタ認知の力を働かせ、「見えない力」を伸ばすために、教師ができる支援はいろいろあります。例えば、生徒の振り返りに対して、教師が「次は(も)こうしてはどうだろう」などと助言し、将来に向けた改善策を一緒に考える「フィードフォワード」も、生徒が「見えない力」を自己評価し、高めていく有効な方法です。

ある場面で獲得した「見えない力」は、別の場面でも発揮することが出来ます。例えば、学校行事を通じて培われた「見えない力」は、メタ認知することで、受験勉強などの別の場面でも発揮しやすくなります。現場の先生方

は、3年生の夏まで部活動に打ち込んだ生徒が、受験勉強で大きな力を発揮する姿をよく見てきたと思います。それも「見えない力」の発揮にほかなりません。目標に向けて努力した、自分の弱点を克服した、メンバーと協力したといった様々な経験の中で、どのような力が育ち、発揮されていたのかを生徒とともに言語化し、行動指標が生徒の内面で習慣化するように支援してあげてほしいと思います(図)。

学校全体で取り組んで互いに高め合う集団を育む

「学びに向かう力、人間性等」などは、幼児期にその土台が醸成されるため、高校時代に育成するのは難しいのではないかとこの質問を受けることがあります。確かに人は、生来の気質を基に乳幼児期から人格が形成されていきますが、成長して脳が発達することにより、意識して高められる力も少なくありません。例えば、セルフコントロール(自制心)はその最たるもので、子どもの頃に落ち着きのなかった人が、成長するにつれて状況に合わせた行動ができるようになる姿は多く見られます。協調性を始めとする社会性に関する力も、年齢を重ねていく中で高まっ

ていきやすい側面があります。

GPなどを具体的な行動指標とし、その習慣化を支援する環境ができると、生徒たちは日々の学校生活の中で、行動指標などについて語り合うようになります。そうして共通の目標に向かって高め合う集団が形成されるとともに、居心地のよい一体感の中で、生徒一人ひとりが自分の持つ「見えない力」を思う存分発揮することができる学校になっていくはず。です。

図 「見えない力」を生徒に育むための教師の支援

1 「見えない力」を具体的な行動指標として言語化する

「見えない力」を発揮する生徒は、どんな場面でどんな行動をしているかを言語化

2 教育活動の中で行動指標の実現を支援する

生徒が「見えない力」を発揮しやすい場面をつくったり、声かけなどを通して行動を促したりする

3 メタ認知の力を働かせ、行動指標に基づいた自己評価をさせる

「見えない力」が発揮できたことを、対話を通じて生徒に実感させ、習慣化させる

※中山准教授への取材を基に編集部で作成。



ベネッセ教育総合研究所
主任研究員
岡部 悟志
おかべ・さとし

知能検査や学力テストで測定される力は、認知能力と呼ばれています。それに対して、自制心や好奇心、協調性、やり抜く力などの情緒や社会性に関する能力は、非認知能力と呼ばれています。非認知能力は、OECDが個人の幸福(ウェルビーイング)と社会の発展を牽引する技能として、その重要性を提唱する「社会情動的スキル」とほぼ同義と考えられます。

非認知能力は、よりよい人生を送るために必要な資質・能力として注目されています。幸福度の向上や身体的健康の増進、反社会的な行動の減少など、生涯にわたって大きな恩恵をもたらすことが、様々な研究によって明らかになっています。

近年は、日本でも非認知能力の認知が広

Column

「見えない力」とは何か、「見える力」との関係は

世界的に注目される「見えない力」

がり、特に幼児教育において注目が集まっています。ベネッセ教育総合研究所の研究でも、幼児期の生活習慣が学びに向かう力の成長の土台になっていることが示唆されています。(幼児期から中学生の家庭教育調査・縦断調査)

非認知能力と認知能力は互いに影響し合う

非認知能力と認知能力は、別々に伸びるものではなく、互いに影響し、補完し合う形で発達すると考えられています。

前掲のベネッセ教育総合研究所の調査では、幼児期に育まれる好奇心、協調性、自己主張、自制心、頑張る力といった非認知能力が、小学校からの学習態度に影響を及ぼすことが分かっています。また、高校生を対象とした別の調査を用いて、粘り強さや挑戦心といった非認知能力と成績にどのような関連があるのかを分析したところ

(図1)、どの学年でも、粘り強さや挑戦心が高いほど成績も高いことが分かり、両者に相関があることが確かめられました。

高校入学時点の非認知能力の高さが、3年次の学習成績にどのように影響するのかについても分析しました(図2)。その結果、入学時の学力は同程度であっても、粘り強さが高い生徒ほど、3年次に校内で成績上位層に入る割合が高いことが分かりました。卒業生の主な進路が異なる3タイプの高校のいずれも同様の結果でした。

高校時代においても、非認知能力の育成は、認知能力の育成にも好影響をもたらすと考えられます。

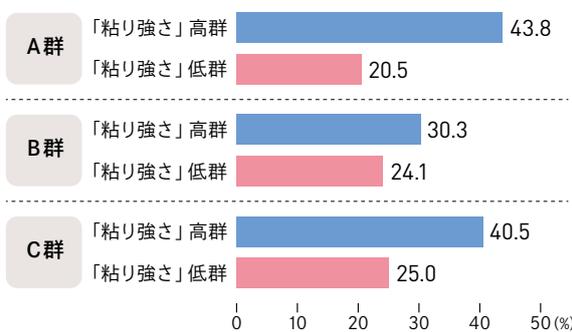
図1 高校生における非認知能力と認知能力の関係



いずれの学年でも、非認知能力である「粘り強さ」「挑戦心」の高い生徒ほど、成績が高くなる結果が見られた。

※「粘り強さ」は「一度決めたことは最後までやり遂げる姿勢」、「挑戦心」は「難しいことや新しいことにいつも挑戦したい姿勢」を示す。
※数値は相関係数。いずれも1%水準で有意である。
※出典 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査 2021-2023」

図2 3年次の成績上位層の比率 (高校のタイプと粘り強さの状況別)



いずれのタイプの高校でも、入学時点の「粘り強さ」が「高群」の生徒は、3年次に成績上位層に入る割合が高くなっている。

※高校のタイプは、卒業生の進路が「国公立大学や難関私立大学への進学者」が多い高校をA群、「中堅レベルの大学への進学者」が多い高校をB群、「専修・専門学校への進学、就職や就職希望者」が多い高校をC群とした。
※出典 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査 2021-2023」

「エージェンシー」をキーワードに、 自ら考え、判断し、行動できる生徒を育む 群馬県教育委員会

群馬県教育委員会（以下、県教委）は、2023年度から、「自ら考え、判断し、行動できる生徒の育成」を最上位目標とした「ステューデントエージェンシーハイスクール」事業（以下、SAH）を実施し、エージェンシーや非認知能力といった、「見えない力」の育成を推進している。SAHの目的や概要については県教委に、具体的な実践については指定校の2校に話を聞いた。

生徒がエージェンシーを 発揮できる環境をつくる

県教委は、2024年度からの「第4期 群馬県教育振興基本計画」（以下、基本計画）において、エージェンシーを發揮して自ら学ぶ「自律した学習者」の育成を目指す5つの重点政策を策定し、非認知能力を始めとする「見えな力」の育成を図っている（図1）。

「エージェンシー」は、「The OECD Learning Compass 2030」の中心的な概念として示されたもので、県教委は、「自分と社会をよりよくしよつと願う意志、原動力」と定義している。平田郁美教育長は、次のように語る。

「人は皆生まれながらに、よりよく生きたい、誰かの役に立ちたいという

思い、自ら成長する力、すなわちエージェンシーを持っています。しかし、私たち大人は、よかれと思って敷いたルールの上を子どもに歩ませ、子どもは自分で考え、決めて、行動する経験を十分に積むことができませんでした。その結果、主体性や自信が育ちにくい傾向にあったことは否めません。子どもがエージェンシーを發揮することができるといふ環境をつくり、自律した学習者を育むという教育ビジョンを示しました」

県教委は、学校を信じて 任せる伴走に徹する

基本計画の策定に先立ち、23年度から県内の公立小・中学校、高校におい

て、自律した学習者の育成に向けた事業を展開している。その中の高校を対象とした事業がSAHだ。

SAHの最上位目標は、「自ら考え、判断し、行動できる生徒の育成」とした。その実現のために、指定校3校が自校の課題を明確にして取り組みの方向性を見だし、生徒がエージェンシーを發揮する活動を実践している（図2）。

「指定校が『生徒を信じて任せる』ことができるように、県教委が決めた活動に取り組んでもらう形ではなく、『学校・教師を信じて任せる』ことにしました」（平田教育長）

つまり、県教委は指定校の伴走に徹している。SAH担当の指導主事は、指定校が週1回程度実施する「コア会議」に参加し、教師と一緒に議論。県教委



教育長
平田郁美
ひらた・ゆみ
2021年度から現職。



高校教育課課長
高橋章
たかはし・あきら
2024年度から現職。

内で確認すべき事項や手続きなどが生じたら、県教委に持ち帰って確認・調整し、指定校が活動を円滑に進められるようにした。高校教育課の高橋章課長は、伴走型の支援についてこう語る。「例えば、活動計画を検討する場面では、よい提案があっても、その活動時間をどう捻出するのか、それで生徒

なぜ育む? 「見えない力」

図1 第4期 群馬県教育振興基本計画(2024~28年度) 抜粋

◎最上位目標

自分とみんなのウェルビーイングが重なり合い、高め合う共生社会へ向けて ~ひとりひとりがエージェンシーを発揮し、自ら学びをつくり、行動し続ける「自律した学習者」の育成~

◎5つの重点政策

- 変化の激しい社会に対応できる資質・能力の育成
- 多様性を尊重し、協働する力の育成
- 自分と社会をより豊かにするための生涯にわたる学びの支援
- 心と体の健康に対する理解と向上
- 時代の変化に対応した教育イノベーションの推進

※群馬県教育委員会資料を基に編集部で作成。

図2 ステューデントエージェンシーハイスクールの概要

◎最上位目標

自ら考え、判断し、行動できる生徒の育成

◎取り組み内容

最上位目標の達成に向けて、研究・実践を行い、新たな学びのスタイル(群馬モデル)の構築を目指す。教師の働き方改革の視点を持って、以下の取り組みを行う。

- ① 授業改善に関すること、
- ② 特別活動に関すること、
- ③ 探究的な取り組みに関すること、
- ④ その他の学校における取り組みに関すること

◎指定校(指定期間)

SAHの趣旨にのっとり、具体的な取り組みを推進する学校
群馬県立前橋南高校、群馬県立高崎女子高校(2023~25年度)
群馬県立伊勢崎高校(2024~25年度)

◎協力校

SAHの趣旨に賛同し、指定校の取り組みを参考にすることで、取り組みを推進する学校
群馬県立前橋高校、群馬県立前橋女子高校、群馬県立高崎高校、群馬県立渋川高校、群馬県立渋川女子高校、群馬県立富岡高校、群馬県立太田フレックス高校、群馬県立沼田女子高校

※群馬県教育委員会資料を基に編集部で作成。

Pick up

非認知能力の評価・育成に関する共同研究を実施

群馬県教育委員会とベネッセ教育総合研究所は、2024年7月から、非認知能力の評価・育成に関する共同研究を進めています。群馬県の「非認知能力の評価・育成事業」の指定校・協力校の実践などを研究することで、育成すべき資質・能力の精緻化や、必要な資質・能力が身についたことを確認するための児童・生徒の姿、及び行動変容の見取り方の確立を目指しています。

先行して2023年から、中学校4校を含む指定校の実践は始まっています。それらを研究させていただくことで、何がうまく機能するのかを、さらに深掘りして整理するお手伝いをさせていただきます。



ベネッセコーポレーション 関東支社長 田邊心技 たなべ・しんぎ

の学力は維持できるのかといった様々な懸念が出て、議論が停滞することもありました。その際には、懸念をくみ取りつつ、提案を実現可能な計画に落とし込めるよう、論点を整理し、見落としている点はないかを先生方と確認することを心がけました。また、取り組みが具体化してくると、実施のための事務手続きが生じます。指導主事が毎週のコア会議に参加したことで、県教委は事務や調整を引き受けやすく、指定校は県教委に報告をする手間が省け、指定校の負担軽減にもなりました」

SAHの活動がしたい! 多くの中学生が志望理由に

SAHの指定1年目から、指定校では生徒が意欲的に活動している(P.10参照)。その様子は県教委公式のSNSで発信し、新聞やテレビの取材も積極的に受けている。SAHの取り組みを全県に広めるためには、生徒の活動を見聞してもらうことが重要だと考えるからだ。

中学生とその保護者には、早くもSAHの活動が認知されている。指定校

の1つである群馬県立前橋南高校では、24年度の高校入試の面接で、多くの受験生が「SAHの活動がしたい」と述べたという。また、24年度の中学生対象の学校説明会は、参加申し込み受け付け開始から5日目には定員の1000人に達した。

「SAHの活動の成否を握る鍵の1つは、教師のマインドです。自律的に活動し、時に教師の想定を超えて成長していく生徒を受け止め、生徒につかず離れず、伴走し続けることが重要です。そうしたマインドも、指定校の取り組み

みの発信を通じて全県に浸透させていきたいと考えています」(高橋課長) 群馬県は、OECD「社会情動的スキルに関する調査」(*)に日本で初めて参加した。24年4月にOECDから1回目の調査報告があり、同県は、共感する力、楽観主義、粘り強さ、責任感に社会経済的な差がないことなどが明らかになった。今後も順次公表される調査報告を、県教委内の「非認知教育専門家委員会」や外部機関の協力を得て分析し、生徒がエージェンシーを発揮することができる環境づくりに生かす考えだ。

* 児童・生徒の社会情動的スキルの形成及び発達を促進する、または妨げる要因を評価する国際的調査。今回が2回目の実施で、16カ国・都市が参加。

実践例

群馬県立高崎女子高校

全教師で自校のあり方を議論し、活動の目的を共有。 生徒の「自立」を組織的に支援する

1年をかけて

全教師の目線を合わせる

群馬県立高崎女子高校は、校内でスクール・ポリシー（以下、SP）とSAHについての議論を、23年度の1年間をかけて次のように行った。

まず、23年6月に全教師参加の校内研修を実施し、SAHの趣旨を教師間で共有した上で、自校の現状と課題、生徒に身につけてほしい資質・能力について話し合った。次に、管理職と各分掌・学年の主任、有志の教師が参加する「コア会議」において、前述の研修で出された意見を整理し、グラデュエーション・ポリシー（以下、GP）の原案を作成。教師から原案への意見を募った。そして、寄せられた意見を踏まえた改訂案を9月の職員会議で提案し、承認され、GPが確定した（図3）。9月に行った校内研修では、SAHの具体的な取り組みについて話し合った。土曜講座の見直しや複数担任制、

行事運営への生徒の参画など、様々な

取り組みのアイデアが出され、分掌内やコア会議で内容を検討。10月の校内研修で再び議論した後、12月末のコア会議で取り組みの原案をまとめ、24年2月末の職員会議に提案し、承認された。そして、SAHの具体的な取り組みを踏まえてカリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを策定した。

そうして策定されたSAHの実施計画は、24年3月に教師や生徒、保護者、学校外に周知された。さらに各取り組みの概要などをまとめた「SAH計画書」を作成し、全教師に配布。4月には、複数の分掌が関係する取り組みを調整したり、コア会議の議論をまとめて周知し、校内から意見を募ったりする役割を担う「SAH統括室」を設けた。丸橋寛校長は、組織づくりや運営方法、教師間の目線合わせを大切にしたいと語る。

「コア会議は週1回実施し、23年度の実施回数は実に40回に上りました。

図3 グラデュエーション・ポリシー（GP）

自立

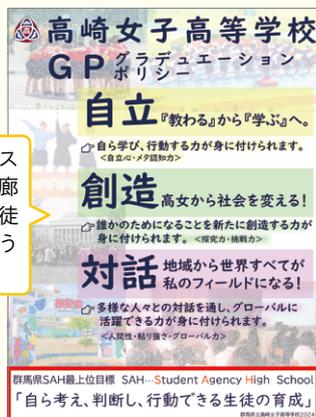
「教わる」から「学ぶ」へ。
自ら学び、行動する力が身につけられます。
〈自立心、メタ認知力〉

創造

高女から社会を変える！
誰かのためになることを新たに創造する力が身につけられます。
〈探究力、挑戦力〉

対話

地域から世界すべてが私のフィールドになる！
多様な人々との対話を通し、グローバルに活躍する力が身につけられます。
〈人間性、粘り強さ、グローバル力〉



GPを掲げたポスターを教室や廊下に貼り、生徒が意識できるようにしている

※学校資料を基に編集部で作成。

少人数での定期的なコア会議と、全教師による校内研修において様々な視点で話し合う中で、取り組みの目的が共有され、SAHへの理解も深まりました。さらにSAH計画書で取り組みの概要について目線合わせをし、SAH統括室が分掌間の連携や調整を図ることで、様々な取り組みは真に組織的なものとなり、かつ迅速に実施できるよ

うになったと考えています」
「自立・創造・対話」というGPの背景にある思いについて、SAH統括室長の中村理恵先生は次のように語る。
「本校の生徒は、教師からの課題や指示をしつかりこなす一方で、見通しを持って主体的な学びを展開することが多少弱く、『自立』が不十分でした。また、多忙により、社会とのつながりが乏しいからか、自ら社会を変えていくビジョンを描く点に弱さがありました。一方で、将来はグローバルに活躍

生徒の実態を踏まえ、

「自立・創造・対話」をGPに

「自立・創造・対話」というGPの背景

にある思いについて、SAH統括室

長の中村理恵先生は次のように語る。

「本校の生徒は、教師からの課題や

指示をしつかりこなす一方で、見通し

を持って主体的な学びを展開すること

が多少弱く、『自立』が不十分でした。

また、多忙により、社会とのつながり

が乏しいからか、自ら社会を変えてい

くビジョンを描く点に弱さがありました。

一方で、将来はグローバルに活躍



吉田恵美
進路指導主事
よしだ・えみ
同校に赴任して9年目。理科
(生物)。



中村理恵
SAH統括室長
なかむら・りえ
同校に赴任して5年目。地理
歴史・公民科(地理)。



青木瑞代
教師
あおき・みずほ
同校に赴任して1年目。



丸橋 覚
校長
まるばし・さつお
同校に赴任して2年目。

したいという生徒が多いのも、本校の特徴の1つです。そこで、『自立』し、社会とつながりを持って多様な人と『対話』し、社会を変えられるような『創造』ができる『見えない力』の育成を目標としました」

GPとして掲げた「自立・創造・対話」を具体化するため、それぞれにキャッチコピーをつけることも、校内研修で出された生徒に身につけてほしい資質・能力の中で数が多かった7つの資

質・能力を振り分けた。

キャッチコピーには様々な案が出された。例えば「自立」のキャッチコピーの原案は「勉強はもう卒業」だったが、「知識・技能などの『見える力』の習得を軽んじるような文言にすべきではない」などの意見が上がった。進路指導主事の吉田恵美先生はこう振り返る。

「学びの自立を目指す点は全教師で共通理解ができていましたが、それが示す具体的な状態は教師によって異なる



井上貴智
教務主任
いのうえ・たかひろ
同校に赴任して2年目。地理
歴史・公民科(地理)。



田村 晶
1学年主任
たむら・あきら
同校に赴任して2年目。英語
科。

学校概要
設立 1899(明治32)年
形態 全日制/普通科/女子校
生徒数 1学年約280人
2023年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、群馬大、お茶の水女子大、東京外国語大、大阪大などに175人が合格。私立大は、自治医科大、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ652人が合格。

りました。出された意見も踏まえてコア会議で議論した結果、「教わるから学ぶ」に決まりました」

生徒が自分で計画を立てて学ぶ時間を時間割に組み込む

SAHとしての同校の取り組みは、「3つのキーと9つの具体的な取り組み」から成る(P.12図4)。「大学進学に最適化した学習プログラム」を1つめのキーにしたのは、進学校としての使命を果たす意志を示すためだ。

生徒の学びの自立を支援する観点で策定した取り組みの1つが、生徒が自分で計画を立てて学ぶ時間を時間割に組み込んだ「Aタイム」だ。24年度は、5・6月に3時間ずつ実施し、年間では15時間実施する予定としている。教務主任の井上貴智先生はこう説明する。

「4月末に、全校生徒にAタイムの趣旨を説明し、自分に必要だと思う学びを出してほしいと伝えました。学びの例を出すと、それにとらわれてしまうと考え、あえて例を示しませんでした」

初めてのAタイムは、生徒も教師も、教師主導ではない授業に戸惑いがあった。しかし、3コマを1チームとし、「まとまりのある学びをデザインしよう」と教師が呼びかけると、生徒は次第に

その時間をいかに活用するかを考えて取り組むようになっていった。振り返りシートには、「計画を立てて有意義に使えた」などと書く生徒が多く見られるようになってきている。

「Aタイムは生徒の『学びの自立』が目的でしたが、自分に必要な学びを考える過程で自己や他者と『対話』し、自分に必要な学びを『創造』する、3つのGPにつながっていました」(中村先生)

24年度の夏季休業では、例年実施していた、教師が指導する夏季講座の代わりに、自分で計画を立てて学習に取り組む学習会を最初の1週間で実施。さらに、各教科で必須の課題を減らし、自習の例として、1学期の学習内容を基にした探究的な学びなどを示した。

「今までの指導をやめることへの戸惑いや、やめても進学実績を維持することができるといった不安は確かにあります。しかし、教師が与える課題で学びが完結するよりも、取り組む課題を自分で選び、学校内外で様々な体験をする方が、知識・技能が生きて働く資質・能力として身につくはずだ。教師は課題の準備がなくなった分、授業づくりや教材研究に力を入れられます。その方が教育全体としてはプラスになると考えています」(吉田先生)

1 大学進学に最適化した学習プログラム

- 1 Aタイムの実施
- 2 長期休業中の個別最適な学びの支援 長期休業中に例年行っていた全員必修の講座をやめ、生徒が自分で計画して学べるよう、支援する。併せて、休業明けの学力テストもやめる。
- 3 学びの時間の確保 定期考査や土曜講座などを見直し、生徒が主体的に計画を立て、調整し、自ら学びに取り組む時間を確保する。
- 4 チーム担任制の実施

2 未来を創る・未来につながる探究学習

- 5 「総合的な探究の時間」の充実 フィールドワークなど、社会との接点を積極的に設け、生徒の興味・関心と社会課題を結びつけた探究学習を支援。総合型選抜の受験につなげる。
- 3 生徒が主体的に取り組む学校行事やグローバル活動
- 6 開校記念式典の企画・運営 有志の生徒による実行委員会を結成し、すべての企画・運営を生徒が担う。
- 7 高女SAH委員会からの提案・実践 有志の生徒約20人による委員会が、校則の見直しや自習室の利用など、学校生活にかかわる改善を提案。生徒の意見を聞きながら実現する。
- 8 生徒主体の修学旅行の検討 修学旅行の企画・運営に生徒が主体的にかかわる。
- 9 SAHの周知・徹底、評価・改善 SAHに関するポスター等の作成、学校のウェブサイトでの取り組みの発信。SAHの目的や成果等を広く周知。活動の不断の見直しを図る。

Aタイム (Agencyタイム、全学年で実施)

生徒が自分で計画を立てて学ぶ時間。24年度は年間15時間を設定。Aタイム当日の朝に活動計画を、終了後に活動の振り返りを担任に提出する。生徒は回を重ねるごとに活動を工夫しており、「科目にとらわれず、自分なりにバランスを考えて復習に取り組めてよかった」「時間を有効に使うにはどうすればよいか考えることができた」といった声が上がっている。

チーム担任制 (24年度は1年次のみ実施)

1年次の7クラスを3つのグループに分け、1グループあたり教師3~5人で担当。グループ内の各クラスの担任は2週ごとに交代し、面談は生徒が希望する教師が行う。生徒のよさや課題を複数の教師で多面的に見取ることができ、生徒への声かけが増えている。生徒の状況や連絡事項など、教師間の情報の共有が重要となる一方で、学級事務の負担が軽減されるメリットがある。

探究学習の実践例

小学校の教師を目指していた生徒は、探究学習を通じて、子どもが安心して過ごせる居場所づくりの大切さを学び、自分たちができることとして、小学生対象の交流会「高女教室」を企画・運営した。



※学校資料と取材を基に編集部で作成。

文化祭の時間短縮の判断に、生徒が提案を提示

生徒の主体的な活動は、23年度後半から活発化した。24年6月に開催した開校125周年の式典の準備を、有志の生徒10人から成る実行委員会が23年12月に着手。生徒の提案で、アメリカで活躍する卒業生に講演を依頼したり、学校の90年史を読み込み、学校の歴史をたどるクイズを作ったりした。

7月の椎樹祭(文化祭)では、生徒のエージェンシーが發揮された場面があった。2日目が猛暑日になり、学校は午後の企画の中止を判断。すると、代表の生徒が校長室を訪れ、丸橋校長に「体育館に来てください」と言った。「私が体育館に行くと、生徒たちが『中止にしないでください』と訴えてきました。泣いている生徒もいました。私が『じゃあ、どうすればよいか?』と尋ねると、生徒たちは午後の企画が実現できる案を示してきました。問題の解決に向けて懸命に知恵を出し合う姿は、私たちが育成を目指す生徒の姿そのものでした」(丸橋校長)

生徒の「自立・創造・対話」を支える環境づくりとして、24年度の1年次から始めたのが、複数の教師が複数のクラスを受け持つ「チーム担任制」だ。

1学年主任の田村晶先生はこう語る。「複数の教師で生徒を多面的に見取り、支援することができるようになりました。生徒は『いろいろな視点が見られる』『話しやすい先生が見つかる』などとチーム担任制を評価しています。どのクラスも特定の教師の色がなくなると、例えば文化祭のクラス企画では、生徒は教師に頼らずに自分たちが思う通りに取り組んでいます」

24年度1学期末にGPに関する生徒の自己評価を実施したところ、例えば2年生(回答率57%)は、回答者の約半数が「自立・創造・対話」はそれぞれ「高まっている」と回答した。青木瑞代(あきみ ずほ)教頭は、振り返りの意義をこう語る。「生徒が主体性と自分勝手に履き違えないように、自分の言動が誰かのためになっているかどうかをメタ認知できることが重要です。授業や行事の振り返り、教師の声かけなどを通じて、生徒が自分を客観視することができるよう、支援していきます」

丸橋校長は、生徒がGPの改訂などに参画することも考えているという。「生徒は自立して行動することができる存在であり、学校をつくる一員として生徒と教師は対話をし、協働して本校の教育活動をよりよいものにしていきたいと思っています」

実践例

群馬県立前橋南高校

生徒の活躍などを伝えるジャーナルを毎週発刊。
エージェンシーとは何かを全校に浸透させる

全校に教師の思いを発信。
すぐに生徒が動き出す

県教委からSAHの指定を受けた群馬県立前橋南高校は、「できるところから進めていこう」というスタンスで、23年度、「見えない力」を育成するための改革に着手した。

5月、高校総合体育大会の県大会に向けた壮行会で、星野亨^{ほしの けい}教頭が全校生徒に対して、自校がSAHの指定校となったことを報告。自校が考えるエージェンシーや非認知能力の重要性について説明し、「自ら考え、判断し、行動していこう」と呼びかけた。6月のPTA総会では、当時の校長が保護者に、県の基本計画やSAHの趣旨を説明し、認知能力とともに非認知能力の育成にも力を入れていくことを伝えた。

さらに、生徒・教師・保護者への啓発と自校の活動の情報発信を目的として、「MAENAN SAH Journal」(以下、ジャーナル、写真1)を毎週刊行する

ことにした。エージェンシーや非認知能力に関する情報、生徒がエージェンシーを発揮した活動などを掲載。校長や教頭がそれらの情報や活動についてのコメントを書き、生徒の主体的な行動を歓迎する旨のメッセージを発信し続けた。星野教頭は、現在も毎週ジャーナルを発刊し続けている意図を次のように語る。

「多くの人にとってエージェンシーや非認知能力はなじみのない言葉ですし、それらを全校を挙げて育むのは、本校では初めてです。SAHの目的を共有し、エージェンシーや非認知能力といった『見えない力』を誰もが日常的に意識できるようにしようと考えました」

「自ら考え、判断し、行動すること」をいち早く体現したのは、生徒会役員だった。6月、生徒は生徒会係担当の原澤正樹先生に、「硬式野球部の試合の応援



写真1 「MAENAN SAH Journal」は、校内のネットワークで共有するほか、学校のウェブサイトでも公開。2024年7月までに53号を発刊した。
※学校資料をそのまま掲載。

援に有志の生徒が行けるよう、応援団を結成したい」と相談。それは授業がある日の試合も生徒が球場に行つて応援することで試合を盛り上げ、全校生徒の一体感を高めたいという思いからだった。

原澤先生は、その提案を企画書にまとめるよう助言。生徒は企画書を持って校長・教頭と交渉した。校長・教頭は試合当日の移動や暑さ対策、欠席する授業への対応など、検討すべき点を指摘。生徒はそれらの点についての対応策を調べ、考えをまとめ、校長・教頭に伝えた。そうしたやり取りを何度も繰り返し、企画を実現させた。



校長
原 拓史
はら・ひろふみ
同校に赴任して1年目。



教頭
星野 亨
ほしの・けい
同校に赴任して2年目。



1学年主任
高田 慧
たかた・あきさ
同校に赴任して5年目。生徒指導部生活係担当。国語科。



1学年担任
原澤正樹
はらぞん・まさき
同校に赴任して8年目。生徒指導部生徒会係担当。英語科。



群馬県総合教育センター
長期研修員
児島佐理枝
こじま・さりえ
同校に赴任して4年目。理科(生物)。

学校概要

設立 1975 (昭和50) 年
形態 全日制/普通科/共学
生徒数 1学年約200人
2023年度卒業生進路実績 国公立大は、筑波大、宇都宮大、群馬大、埼玉大、千葉大、東京学芸大、新潟大、信州大、高崎経済大、東京都立大などに65人が合格。私立大は、青山学院大、中央大、東京理科大、法政大、明治大、立教大などに延べ325人が合格。

なぜ育む? 「見えない力」

図7 アンケートで自己評価する非認知能力

- ①課題発見力 (問題の所在を明らかにし、必要な情報分析を行う力)
 - ②計画立案力 (問題解決のための効果的な計画を立てる力)
 - ③実践力・実行力 (計画に沿って実践・行動する力)
 - ④親和力 (円滑な人間関係を築く力)
 - ⑤協働力 (周囲の人たちと協力的に業務を進める力)
 - ⑥統率力 (目標に向かって組織を動かす力)
 - ⑦感情制御力 (自分の気持ちの揺れをコントロールする力)
 - ⑧自信創出力 (ポジティブな考え方やモチベーションを維持する力)
 - ⑨行動持続力 (よい行動を習慣化させる力)
 - ⑩レジリエンス (失敗や困難から立ち直る力)
 - ⑪創造力・想像力 (新しいものを考えたり、創り出したりする力)
 - ⑫柔軟性 (変化に適應する力)
 - ⑬交渉力 (相手と話し合い、合意点を探る力)
 - ⑭発信力・発表力 (自分の意見や考えを分かりやすく発表する力)
 - ⑮ストレスコントロール・楽観性・忍耐力・鈍感力 (気に病まず、物事を進める力)
 - ⑯自己肯定感 (ありのままの自分を肯定する感覚)
 - ⑰判断力 (危機的状況や複数の選択肢が存在する状況で、効果的な意思決定を下す力)
 - ⑱ユーモア力 (言葉等によって、相手やその場を和ませたり、その場の空気を温かくする力)
 - ⑲共感力 (他者の考えや意見、喜怒哀楽といった感情に寄り添うことができる力)
 - ⑳労力対効果・効率実践力 (コスパ・タイパなどを含め、効率よく物事を推し進める力)
- ①～⑮は、社会情動的スキルや社会人基礎力などを参考に、星野教頭が原案を作成し、コア会議と職員会議を経て決定した項目。⑯～⑳は、1回目のアンケートの生徒の自由記述を基に設定した非認知能力で、() 内の説明も生徒の記述を生かした。 ※学校資料を基に編集部で作成。

図8 「生物基礎」の振り返りシート (抜粋)

日付	本時の疑問点	解決した疑問に○をつけてください	意欲系 課題発見力 計画立案力 実践力など	忍耐系 感情制御力 レジリエンス 行動持続力など	協働系 協働力 発信力 親和力など
			①課題発見力、 ②計画立案力、 ③実践力など	⑦感情制御力、 ⑩レジリエンス、 ⑨行動持続力など	⑤協働力、⑭発信力、 ④親和力など

生徒は授業の終わりに、授業中に疑問に思った点を記入。その後の授業や自習などで疑問が解消したら○をつける。また、授業中に発揮した非認知能力を記入する。「見えない力」を育成する手立てとして有効かどうか試行中。 ※学校資料を基に編集部で作成。

づくりを進めている。まず、1・2年生が対象の土曜補習を廃止し、学習以外でも自分の関心のある校内外活動に挑戦しよう、生徒に呼びかけている。

各教科も課題を見直した。例えば英語科は、毎週末の課題を廃止した。

「以前は課題が未提出の生徒を放課後に残して取り組ませていましたが、それによって成績が伸びた生徒はほとんどいませんでした。成績が伸びたのは、教師に自ら添削を依頼したり、自分で計画を立てて学習したりした生徒でした。そこで、問題集の範囲を指定

し、1か月後の提出日までに自分で計画を立てて取り組ませる形にしました」(原澤先生)

全教師による授業改善のプロジェクトも推進中だ。教師がそれぞれ、①授業で生徒の主体性を育成する工夫、②1人1台端末の効果的な活用、③特定の非認知能力を育成する工夫のいずれかを選んで授業改善を図っている。

群馬県総合教育センター長期研修員の児島佐理枝先生は、担当する生物で、③をテーマとした授業改善に取り組んでいる(図8)。前述の非認知能力の自

己評価のアンケートで、「平均より低いと思うもの」に多く挙げられていた「②計画立案力」と「③実践力・実行力」を發揮する場面を盛り込んだ、DNA抽出の実験に取り組み5時間の単元計画を立てた。児島先生はこう語る。

「生徒が班で実験方法を考え、実践し、成功・失敗にとらわれずに得られた結果を考察し、次につなげる展開にしました。それまで行ってきた、教師が実験方法を説明する授業よりも時間がかかり、ほかの単元との調整が必要ですが、生徒が自走して学習する上で

は必要なプロセスだと考えています」

教師は何をすべきか。
生徒の姿から理解が深まる

今でこそSAHの取り組みは順調に進んでいるが、導入当初は教師間に戸惑いもあったと、高田先生は語る。

「見えない力」を育成する重要性は分かっているも、生徒の主体性を尊重しながら校内の秩序を保つことができるといった不安が教師間にありました。しかし、生徒が『主体性』を履き違えずに、教師の支援を受けながらも自分たちの力で物事を進め、応援団を結成したり、頭髮・服装に関する校則の改定を実現したりする姿を見るうちに、生徒が『自ら考え、判断し、行動する』とはどういうことか、教師は生徒をどう支援すべきかについて、本校の教師は次第に理解を深めていったと感じています」

原拓史校長は今後の展望をこう語る。

「『自ら考え、判断し、行動する』ことは、特別な場面だけでなく、授業や特別活動、部活動など、普段の学校生活の中でも見られることです。教師がそれを見逃さずに光をあて、生徒のウェルビーイングが一層高まる学校をつくっていきたいと考えています」

ロールモデルを身近に感じさせる探究学習で、「実行力」「自走する力」を育む

石川県立金沢泉丘高校いずみがわか

石川県立金沢泉丘高校では、同校の教育目標を体现する生徒の姿を教師たちが語り合う中で、「実行力」と「自走する力」を、育成を目指す資質・能力の中核に定めた。そして、それらの「見えない力」を生徒が発揮する教育活動として探究学習を重視し、教師はその支援に注力している。

探究学習の成果を踏まえた 育成方針を掲げる

全国屈指の進学校として知られる石川県立金沢泉丘高校。2003年度からスーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）の指定校として、国

際的に活躍できる科学技術系人材の育成に努めている。また、15年度からの5年間はスーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）として、グローバルな社会課題について多面的に考え、多角的に行動する力を備えた人材の育成に取り組んできた実績を持つ。

同校は理数科と普通科を設置し、普通科は2年次からSGコースと普通コースに分かれるが、どの生徒も、社会課題に関する探究学習や科学的な探究

学習にそれぞれ取り組んでいる。普通コースの探究学習はこれまで1単位であったが、23年度からはSGコース、理数科と同じ2単位とした。それは、SSHとSGHの2つの事業で培った指導ノウハウを、探究学習を媒介に普通コースにも波及させるためだ。

そうしたことが地域にも周知され、近年は、東京大学や京都大学などの難関大学を目指して学習に励むとともに、探究学習にも熱心に取り組む生徒が集う学校として知られるようになったと、SSH推進室主任の井川健太先生は説明する。

「本校はSSH、SGHの研究成果を踏まえて、グローバルリーダー、スペシャリスト、チャレンジスピリットを生徒育成の方針として掲げていま

す。その実現のためには、教科学力という『見える力』はもちろん、社会をよりよく動かし続けるための『見えない力』も必要です。『見えない力』を育むための重要な場として、探究学習が機能しています」

生徒の姿を語り合う中で 資質・能力を明確化する

同校の生徒会のウェブサイトでは、学校が特に力を入れている教育活動として、探究学習に言及している。探究学習を通して身につけることができる資質・能力について、生徒会の生徒たちは「主体性や実行力、計画力、コミュニケーション能力、論理的思考力など、多くの能力」を挙げているが、それら

はまさに、同校の教師たちが高校生活を通じて生徒に育みたいと考えている力と同じだと、井川先生は語る。

「今年度の学校経営計画書では、中・長期的目標の中に、育成を目指す資質・能力として『実行力』『自走する力』を明記しています(図1)。それは、本校ではどんな生徒を育てたいのか、私たち教師が話し合った末にたどり着いたキーワードです。生徒会の生徒たちが挙げる『主体性』『計画力』は、中・長期的目標の中の『自走する力』と同義だと思っています」

「実行力」「自走する力」は、主に若手教師が日々生徒と接する中で感じていたことを言語化したものだ、SGH推進室の北村仁志先生は振り返る。「中・長期的目標をより具体化しよ

なぜ育む? 「見えない力」

うという井川先生の呼びかけに応じて、若手の先生と、この学校でどんな生徒を育てたいか、生徒や教師がリーダーと認識する生徒が備えている力は何か、授業、探究学習、部活動など、様々な場面を思い浮かべながら、語り合いました。例えば、教科書の記述をうのみにせず、『もつと別の説明が



SGH推進室主任
井川健太
いかわ・けんた
同校に赴任して7年目。理科(物理)。



SGH推進室主任
鈴木達也
すずもり・たつや
同校に赴任して12年目。英語科。



SGH推進室
北村仁志
きたむら・ひとし
同校に赴任して4年目。地理歴史・公民科(世界史)。

学校概要

設立 1893(明治26)年
形態 全日制/普通科、理数科/共学
生徒数 1学年約400人
2023年度卒業生進路実績 国立大は、北海道大、東北大、お茶の水女子大、東京外国語大、東京工業大、東京大、一橋大、富山大、金沢大、福井大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに211人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ229人が合格。

図1 24年度学校経営計画書に掲げる中・長期的目標

本校教職員からなる「チーム泉丘」は、変化の激しい社会における答えのない様々な課題に協働して立ち向かう**実行力**、本当にこれでよいのかと様々な角度から探究心を持って思考し、自分の考え・想いを語る力を積み重ね、ひいては一人ひとりの夢、目標に向かい**自走する力**を、生徒に育成する。この実行により、社会に貢献するリーダー、他者を思いやることのできる人材を輩出する学校、全国一の魅力ある公立高校になる。

※学校資料を基に編集部で作成。

必要ではないか』などと、自らより深い追究を求める生徒や、自分が取り組む探究学習に対して研究者などからアドバイスをもらい、それをヒントに自分の取り組みを多角的に検証する生徒など、私たちが日々接している生徒の行動を振り返る中で、『実行力』『自走する力』というキーワードにたどり着きました。

SGH推進室主任の鈴木達也先生は、『実行力』『自走する力』という言葉をもとに、具体的な生徒の姿でイメージしたことに大きな意味があると考える。「抽象的な言葉の共通理解を図るため、学校経営計画書の記述をもつと細

「見えない力」を備えた生徒の姿を見る

かくするといった方法も考えられませんでした。しかし本校は、あくまでも一人ひとりの教師が、それぞれの授業などで出会った生徒の姿を通して共通理解を図る方法を選びました。育成を目指す資質・能力である『実行力』『自走する力』が、それぞれの教師の中で具体的な生徒の姿としてイメージできたことで、日々の指導につながられるようになったのだと思います。

「実行力」「自走する力」という資質・能力を育む上で、ロールモデルとなる生徒の姿を校内の生徒や教師が共有することを同校では重視している。

「SSHやSGHを通して探究学習の経験が蓄積されている理数科、普通科SGコースでは、ロールモデルとして共有したい生徒の姿が頻繁に見られます。私たち教師は、ロールモデルとなる生徒の言動を全校の生徒にも積極的に紹介し、校内全体に『実行力』『自走する力』を発揮した取り組みを波及させています。また、本校の探究学習は、全学年同じ時間に実施するようにしているため、その時間は、生徒はほかのクラスの生徒や他学年の教師に相

談したり、質問したりに行くことができます。探究学習は校内のたくさん仲間から気づきを得る学びだという空気感をつくるのが大切なのです」(鈴木先生)

「実行力」「自走する力」を探究学習の中でどれだけ発揮することができたかを、生徒が他者に向けて披露する場が、3月に1日かけて実施される「探究の日」だ(P.18図2)。普通コース、SGコース、理数科それぞれの代表チームの探究学習の発表を聞いたり、学年やクラスの枠を超えて生徒が自分の取り組む探究学習について語り合ったりする行事で、その運営の大半を生徒が担当する。

「探究の日」には、教師が「実行力」「自走する力」を発揮した生徒の姿を目のあたりにするとともに、これからの高校生の成長には探究学習が必要不可欠であり、その学びを支援する力はずべての教師に求められるものであることを実感してもらおうというねらいもあると、井川先生は言う。

「ペーパーテストでよい成績が取れる生徒を育てるのであれば、授業で演習を繰り返せばよいでしょう。しかし、そうした指導しかできない教師には、本校の生徒はついてきてくれません。「探究の日」において、生徒の様子を

図2 「探究の日」のプログラム

トップモデルを知る(125分)	2年生代表チームのモデルプレゼンテーションと質疑応答。3年生も講評に参加する。
アイスブレイク&交流(60分)	学年・クラス・文理を混ぜた混成グループで活動する。
探究成果を全班がプレゼン(60分)	1年生は、各自が「2年生で行う探究活動のテーマ」について発表。 2年生は、各自が「2年次の探究内容」について発表。
学びを対話(ダイアログ)で振り返る(70分)	前半は、学年・クラス・文理を混ぜた混成グループで活動する。各自が「1年間の取り組み」について内省・発表し、互いに助言、質問、感想を述べ合う。 後半は、自分のHRで活動する。各自が「本日の取り組み」について内省・発表し、互いに助言、質問、感想を述べ合う。



※学校資料を基に編集部で作成。

見ることで、これからの教師に求められる力を改めて確認しているのです」
同校のような進学校が、「見えない力」が求められる探究学習の発表に丸一日を使うことに大きな意味がある」と、北村先生は考える。

「午前8時から午後3時までを費やすことを通じて、生徒も教師も、自校では探究学習が重視されていて、『実行力』『自走する力』などの資質・能力の育成を目指しているということ

実感するはずですよ」

生徒が「実行力」「自走する力」を發揮した探究学習の事例を、北村先生、井川先生は次のように説明する。

「文系の普通コースの生徒たちが実験を行い、データに基づいた社会実装を目指すなど、理系の視点も大切にして探究学習に取り組むケースがいくつも見られました。例えば、馬の厩舎（きやうしゃ）で寝床として活用する敷料（しきりょう）について研究したチームは、大学の馬術部にインタ

ビューを行い、実態を把握した上で、放置竹林や廃タイヤから原料を得た敷料を開発するための実験を行うなど、多角的で文理融合の探究学習に取り組んでいました」（北村先生）

「探究学習の校外発表会で京都に行くことになった生徒たちが、日帰りではなく、泊まりがけで行きたいというので、理由を聞いたところ、『大阪に会ってみたい研究者がいる』『時間がつくれそうなら、面会のアポ取りをする』と云うのです。先輩たちの探究学習の様子を見て、やりたいことはどんどん『実行』『自走』してよいと理解しているのだと思います」（井川先生）

「見えない力」を育む授業を模索

「実行力」「自走する力」などの「見えない力」がどの程度生徒に身についたのか、評価についても同校は模索してきた。理科では、ルーブリックを作成し、生徒自身が探究学習の中で自分の成長を自覚できるようにしている。また、普通科では、教師が生徒の活動の振り返りに目を通し、一人ひとりの成長を見取っている。

「客観的な評価も大切ですが、生徒が今後どのような自分になりたいのか

を考えることが、より重要なのだと思います。例えば、ある2年生の探究学習の発表を『実行力』に留意して聞いた時、1年生のAさんは、『既存の方法にとらわれないアイデアを実行する力を伸ばしたい』と思い、Bさんは、『周囲を巻き込みながら実行する力を身につけたい』と思うかもしれません。ひとくちに『実行力』と言っても、イメージすることは異なっており当然です。生徒の振り返りに目を通してながら、それぞれが伸ばしたい力を言語化できるように、面談などで支援しています」（北村先生）

探究学習を通じて「見えない力」の育成の土壌が校内に醸成されたからこそ、同校では教科の授業の中での「実行力」「自走する力」の育成にも今後は注力していく考えだ。

「教師から与えられた課題にきちんと取り組んでいるかといった表面的な見取りではなく、間違えた問題をどのように解き直したのかなど、生徒の思考のプロセスにおける資質・能力の発揮を見取っていきたいと思っています。探究学習も教科の授業も、生徒が考えなくなる時間とすることが重要ですから、『実行力』『自走する力』の育成の視点からの授業改善を目指す探究授業も充実させていきます」（井川先生）

日々の振り返りの充実によって、 社会で求められる非認知能力を育む

岡山県立岡山東商業高校

地域に根差した実学教育を通じて有為な人材を送り出してきた岡山県立岡山東商業高校は、社会の変化に対応することが求められるこれからのビジネスリーダーに必要な「見えない力」を育む教育活動に力を注いでいる。各活動の根幹を支えるのが、様々な場面での生徒の振り返りと、それを基にした教師の丁寧な見取りだ。

「見えない力」を 実社会で必要な力として育成

大学等への進学者も含め、卒業生の約9割が県内企業に就職する岡山県立岡山東商業高校では、地域の発展に貢献する上で必要な資質・能力を育むため、地域に根差した実学教育を展開している。6000人以上が収容可能な大型多目的施設を会場に、全学年がクラスごとに企業と連携して1店舗ずつ出店し、商品を販売するイベント「東商デパート」(写真)もその1つだ。

同校では、全科共通の育てたい生徒像として、「ビジネスの視点から、当事者として自分と社会とのつながりを考え続け、課題を発見して自分の意見を根拠を持って述べる」ことができ、

「創造性を有し主体的に行動するとともに、多様な人々とつながり、協働し物事を解決しようとする」姿を掲げている。特に、主体的に行動し、他者と問題解決しようとする力は、変化の激しいグローバル社会やSociety 5.0に対応することが求められるビジネスリーダーに必要な資質・能力であると、森山泰幸校長は説明する。

「他者と協働して問題を解決する土台となるのが、自己管理能力など、点数化が困難な『見えない力』です。本校では、ビジネスリーダーに必要な『見えない力』を、非認知能力として教師と生徒が共通認識を図り、商業の専門知識などの認知能力とともに、その育成を目指しています」

非認知能力の育成の鍵となるのは

が、振り返りの充実だ。同校では、2014年度から導入した「今未来手帳」(※1)を活用して、授業や特別活動など、様々な場面での振り返りに力を入れていると、生徒課長の山本靖宏先生は説明する。

「どんなことを意識して授業に取り組んだのか、クラスメートと学ぶ中でどのような成長を果たしたのかを、各授業で生徒は振り返り、その結果を手帳に記録していきます。私たちはその記録を通して、生徒がどのような非認知能力を発揮したのかを見取り、次の単元の学びに向けたアドバイスを生徒にするとともに、主体的に学習に取り組む態度の評価材料にもしています」

授業中に生徒が非認知能力を発揮する場面が多いほど、生徒は振り返りに



写真 「東商デパート」の開催当日の様子。例年、4時間30分の営業時間中に8000人を超える来場者があるという。

おいて自分の非認知能力の状況を考えやすくする。そこで同校では、「自身の課題に気づく」「物事を解決する」「努力を惜しまない」といった力を発揮す

* 1 ベネッセが提供する手帳型教材。ラインアップは定型版、カスタマイズ版の2種類。岡山県立岡山東商業高校はカスタマイズ版を採用している。



校長
森山泰幸
もりやま・やすゆき
同校に赴任して4年目。



教頭
前田能成
まえだ・よしのり
同校に赴任して2年目。



主幹教諭、進路指導課長
梶原由紀子
かじはら・ゆきこ
同校に赴任して6年目。商業科。



生徒課長
山本靖宏
やまもと・やすひろ
同校に赴任して11年目。保健体育科。



商業科主任
平松知之
ひらまつ・ともゆき
同校に赴任して9年目。商業科。

学校概要

設立 1898（明治31）年
形態 全日制/ビジネス創造科・情報ビジネス科/共学
生徒数 1学年約320人
2023年度卒業生進路実績 国公立大は、滋賀大、岡山大、鳥取大、山口大、香川大、大分大、尾道市立大、公立鳥取環境大などに12人が合格。私立大は、明治大、京都産業大、近畿大、関西大、関西学院大などに延べ109人が合格。短大・専門学校進学119人。就職87人。

る場面を授業中に設定している。

「体育の授業では、自分の実技の様子をタブレットで撮影して、提出させています。自分が納得するパフォーマンスができるまで、時間の許す限り何度でも実技に取り組んでよいとする。ここで、生徒は粘り強く課題に向き合う力を発揮します。自分の努力によって結果を更新することができるようにすれば、授業は非認知能力を発揮しやすい場になり、振り返りの質も高まるはずです」（山本先生）

同校では今年度から、放課前の5HRの10分間を使って、「今未来手帳」による1日の振り返りを行っている。「週の日を決め、それがどの程度達成できたかを振り返り、その記述を写真に撮って、生徒はそれぞれタブレットから担任に送信します。担任はコメントを加えて生徒に返信し、自己管理能力の育成を支援しています。手帳を活用したこまめな振り返りを通して、自分を省察する力を生徒に育んでいるのです」（山本先生）

「見えない力」を生徒の中に探し、褒める

生徒が、自分の中に「見えない力」がどのくらい育まれたかを自己認識す

るためには、振り返りの蓄積と教師の支援が不可欠だと、商業科主任の平松知之先生は語る。

「非認知能力は『見えない力』ですが、『今未来手帳』などに蓄積された生徒の振り返りから、生徒がどのような成長を果たしたのかが分かります。そこで私たち教師は、『君はここが成長したね』と生徒に伝えることで、生徒の自己肯定感を高めています」

同校の教師は、「今未来手帳」を始めとする振り返りの記録を、「生徒のよいところを発見し、声をかけるための材料」と考えている。

「もちろん、褒めるばかりではなく、注意しなければいけない場面もありますが、その時にも、『ここはしっかりとできているね』と、できている点を認めることで、生徒は教師の注意を素直に受け入れます」（平松先生）

生徒の「見えない力」を丁寧に見取っていくこうとする教師の姿勢は、今後ますます求められるようになると、森山校長は語る。

「これまで私たちは、生徒に資格・検定や就職試験、大学入試に挑戦させることを通じて、粘り強さや自己管理能力を身につけさせてきました。しかし、日本の高校生の自己肯定感の低さが課題となる中で、『見えない力』を

日々の営みにおいて向上させ、生徒にも自覚させることができます。重要になってきています。「見えない力」は、教科学習などでの『見える力』の習得意欲の向上にもつながるはずですよ」

同校では23年度からの試みとして、ベネッセと共同で「見えない力」の変容を可視化する研究に取り組んでいる。「進路達成プログラム（*2）自分らしさデザイン（*3）」において、「課題を明らかにする経験」「目標・計画を実行する経験」など、非認知能力の育成につながると思われる6つの経験について、生徒がどの程度経験を積んだかを測定し、自校の生徒の傾向を把握している（図1）。そして、生徒にどのような経験が不足しているかを教師間で共有し、その後の声かけに生かしている。

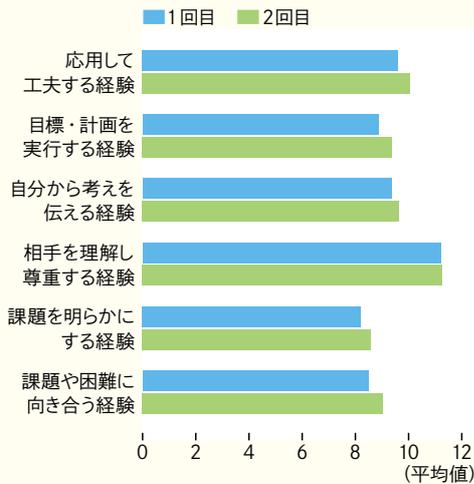
「見えない力」を鮮明にして教育活動を再編する

実社会でも求められる非認知能力などの「見えない力」を育成することは、生徒の高校生活をよりよくすると、主幹教諭の梶原由紀子先生は語る。「振り返りの内容から非認知能力の高まりを感じると教師間で話題になった生徒がその後、大学入試や就職試験

* 2 「自分の軸を持った進路選択」の達成を支援するためのベネッセの進路学習教材。
* 3 アンケートを基にした学問・職業・上級学校との適性を可視化する診断と、診断の結果返却後に取り組む、自己理解、学問・職業探究等の進路ワークなどがセットになった教材。

図1 生徒の資質・能力の変容 (進路達成プログラムにおける調査)

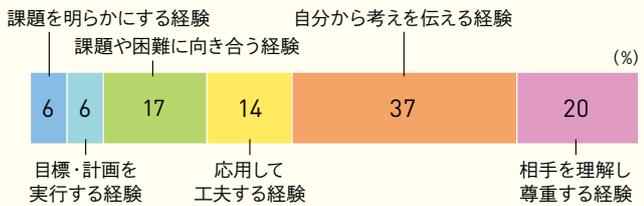
23年度2年生の6つの経験についての変容



ビジネス創造科2年生の生徒を対象にした調査(2023年5月・12月に実施)において、「見えない力」の育成につながる経験がいずれも増加していることが分かった。

※学校資料を基に編集部で作成。

24年度1年生の6つの経験の現状



24年度1年生を対象とした調査では、課題を明らかにする経験や、目標・計画を実行する経験が不足していることが分かった。

6つの経験を促す教師の支援について語る24年度1年生の声

	自分が最も大切にしたい経験	具体的にどのようなことをしたか・その際の教師の支援は
生徒A	課題を明らかにする経験	部活動やサークル活動が計画通りにいかなかった時に、どうすればうまくいくかを考えながら取り組んだ。そうした試行錯誤を顧問の先生が褒めてくれた。
生徒B	目標・計画を実行する経験	資格・検定取得に向けて決められた日にちまでに学習を進めた。先生は、複数の科目の学習が順調に進んでいる時などに、「どちらもできるんだね」などと褒めてくれて、自信を持たせてくれた。

課題を明らかにする経験や目標・計画を実行する経験を積ませるように、教師は意識的に生徒に声かけを行っている。

図2 育成を目指す生徒像と非認知能力の育成につながる経験のひもづけ

岡山東商業高校で育成を目指す生徒像(素案)	「進路達成プログラム」で診断している経験
<ul style="list-style-type: none"> 課題を発見して自分の意見を述べる 	<ul style="list-style-type: none"> 課題を明らかにする経験 課題や困難に向き合う経験 自分から考えを伝える経験
<ul style="list-style-type: none"> 新たな価値を創造する 	<ul style="list-style-type: none"> 応用して工夫する経験
<ul style="list-style-type: none"> 他者と協働する 	<ul style="list-style-type: none"> 相手を理解し尊重する経験
<ul style="list-style-type: none"> 主体的に行動する 	<ul style="list-style-type: none"> 目標・計画を実行する経験

※学校資料を基に編集部で作成。

の小論文、志望理由書の内容、面接での受け応えなどで驚くような成長を見せることがよくあります。そうした生徒の姿を見てきたからこそ、本校の先生方は、非認知能力の育成に一体となって取り組んでいるのだと思います。」

現在、同校では非認知能力の重要性のさらなる理解を校内、そして地域に浸透させるために、育成を目指す「見えない力」を、すべてのステークホルダーにとって分かりやすい言葉で表現

することを目指している。24年度中の完成を目標に、校訓やスクール・ポリシー、生徒のロールモデルとなる地域のビジネスリーダーの姿などを基に、自校で育成したい生徒像、育みたい資質・能力について校内で語り合っていると、前田能成(のりなり)教頭は説明する。

「課題を発見して自分の意見を述べる力、他者と協働する力などが、本校の生徒に育みたい資質・能力の中核になるのではないかと見えてきました。本校で育成を目指す『見えない力』を、「進路達成プログラム自分らしきデザイン」の6つの経験とひもづけて(図2)、『見えない力』の育成と6つの経験の関係をさらに検証し、その結果を、探究学習や課題研究、授業、そして『東商レポート』などを始めとする多様な取り組みにおける活動内容の改善や再編成に役立てていくことを考えています。」

「学校行事や部活動、課題研究などが盛んな本校は、生徒が他者とかかわる機会が豊富で、非認知能力を育む上で最適な環境にあると思っています。本校ならではの強みを生かして、今後ますます重要になる『見えない力』を生徒に育んでいきたいと考えています。」(森山校長)

教科を超えて多様な資質・能力を育み、 評価する仕組みをつくる

大分県立日田高校

大分県立日田高校では、SSHの活動を通じて見えてきた生徒の課題を踏まえ、育成を目指す資質・能力を設定。さらに、ルーブリックやシラバスをつくることで、教科を超えて校内の教師の間で授業改善の方向性について共通認識を促すとともに、多角的で、教師・生徒にとって納得感のある評価方法の確立に力を注ぎ、「見えない力」を見える化することによって、指導・学習改善を実現している。

SSHの活動の充実を

「見えない力」の視点で追求

2011年度からスーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）に指定されている大分県立日田高校。21年度からのSSH3期目に向けての課題を、探究学習に取り組む生徒の姿を基に検証した結果、様々な社会問題の解決に貢献することができる生徒に育むべき資質・能力として、「日田高RGB（以下、「RGB」）を定義するに至った（図1）。「主体的に学習に取り組む態度」のような「見えない力」などから成る「RGB」の策定プロセスを、研究部副主任の工藤督石先生は次のように振り返る。

「SSHの研究・開発を担う研究部

内で生徒の課題について語り合う中で、今後、生徒にどのような資質・能力を育むべきかが論点になりました。先生方から紹介されたSSHの活動に取り組む生徒の姿から、仮説を立てる力やデータに基づく検証を行う力、研究の成果を具現化する意志などを生徒に育んでいきたいという声が上がりました。SSHの活動をブラッシュアップしていく方向性が共有できました」

しかし、3期目のSSHに新しい活動を加えることは困難な状況にあったと、指導教諭の高倉圭一先生は語る。

「本校のSSHの活動は、大学や研究機関、官公庁、企業等と連携した活動は充実していましたが、生徒も教師も活動に追われている様子が見られました。そこで、新たな活動を増やすの

図1 「日田高RGB」と「RGBゴール・ルーブリック」

●「日田高RGB」

日田高RGB		目指すもの	該当する観点
Research (探究する力)	課題設定力	日常生活や社会の中に、取り組むべき課題を見いだす力	思考・判断・表現
	仮説構築力	根拠のある仮説(予想)を立て、検証への道筋をつける力	
	分析検証力	情報やデータを分析・解釈して、仮説(予想)を検証する力	
	論理表現力	論理的に思考し、筋道を立てて分かりやすく表現する力	
Glocal (波及させる力)	発信力	自己の考えや社会への提言を相手に応じた方法で発信しようとする志	主体的に学習に取り組む態度
	実践力	具体化した解決策を、地域や社会に役立つよう、具現化しようとする志	
Basis (基盤となる力)	知識活用能力	問題解決に必要な知識を見いだす力、知識を融合・活用する力	知識・技能
	情報活用能力	問題解決のために情報を収集、整理、比較、統合する力	

●課題設定力のゴール・ルーブリック（一部）

評価観点	5(S)	4(A)	3(B)
課題設定力	求めているレベルを超えて達成している。	求めているレベルを十分に達成している。	求めているレベルをおおむね達成している。
課題設定力	批判的、俯瞰的に物事を見ることで社会問題や自然現象に気付きや疑問を持ち、それを具体化、焦点化し、課題を設定している。	社会問題や自然現象に気付きや疑問を持ち、それを具体化、焦点化し、課題を設定している。	社会問題や自然現象に気付きや疑問を持ち、課題を設定している。

※学校資料を基に編集部で作成。

なぜ育む? 「見えない力」

ではなく、そもそも何のためにSSHの活動をしているのか、各活動でどのような資質・能力を育もうとしているのかを整理し、既存の活動の質を高め



遠藤源治
えんどう・げんじ
指導教諭・研究部主任
授業改善プロジェクトリーダー
同校に赴任して4年目。理科。



高倉圭一
たかくら・けいいち
指導教諭・2学年主任
同校に赴任して6年目。英語科。



工藤督右
くどう・ただすけ
研究部副主任、SS探究プロジェクトリーダー
同校に赴任して6年目。理科。



森佐和美
もり・さわみ
生徒指導主任
同校に赴任して5年目。家庭科。

学校概要

設立 1915(大正4)年
形態 全日制・定時制/普通科/共学
生徒数 1学年約200人
2023年度卒業生進路実績 国立立大は、岡山大、九州工業大、九州大、福岡教育大、長崎大、熊本大、大分大、宮崎大などに97人が合格。私立大は、青山学院大、中央大、立教大、早稲田大、立命館大、福岡大などに延べ209人が合格。短大・専門学校進学25人。

ようと考えました。コンテンツベースではなく、「コンピテンシーベースの活動へと発想を転換したのです」

図2 単元の指導と評価の計画 (RGBシラバス)

時数	目標、高めるRGB等、課題、内容等	観点別の主な評価場面			評価方法
		知技(B)	思判表(R)	態度(G)	
1次 (2時間)	○ア物理量の測定と扱い方 【目標】身近な物理現象について、物理量の測定と表し方、分析の手法について理解する 【課題】物理現象の性質、数量的関係はどのように扱えばよいだろうか 【内容】・単位の換算・グラフの表し方	○			<ul style="list-style-type: none"> ・[知] ワークシート(グラフの作成) ・[知] 小テスト(単位換算)
2次 (5時間)	○イ運動の表し方 【目標】物体の運動の表し方について、直線運動を中心に、変位や速度について、規則性や関係性を見いだして表現する 【RGB】 仮説構築力		○		<ul style="list-style-type: none"> ・[思] ワークシート

※学校資料を基に編集部で作成。

「見えない力」を
学力の3要素で見える化

研究部は、SSHの活動や授業全般を通して育成を目指す資質・能力として、現在の「RGB」の8つの力から課題設定力と論理表現力を除く6つの力を、21年4月の職員会議で提案した。研究部主任の遠藤源治先生は、「職員会議では、『提案されたResearchの資質・能力のうちの2つは、自分が担当する教科では育成することが難しいと思う』『観点別学習状況の評価(以下、観点別評価)に向けて、3観点と対応させるべきだ』などと、活発に意見が出された」と説明する。

「職員会議で出た意見を踏まえて研究部で改めて議論し、Research(探究する力)に課題設定力と論理表現力を加えたり、発信力を『思考・判断・表現』ではなく『主体的に学習に取り組む態度』に対応する資質・能力として設定し直したりするなど、『RGB』に修正を加えました。そうして、3領域・8つの力で構成する現在の「RGB」が職員会議で承認されました」さらに研究部では、8つの力が生徒のどのような姿として表れるかを記述した「RGBゴールブック(図1)」を作成し、教師と生徒に共有した。

生徒指導主任の森佐和美先生は、「8つの力が発揮される時の生徒の姿をルーブリックで示したことで、授業でどのような学びを生徒に経験させるべきかが考えやすくなり、授業改善が一気に進んだ」と語る。

「本校には、探究学習の成果を生かして外部コンテストなどで優秀な成績を収める生徒が少なからずいますが、そうした生徒はどのような資質・能力を身につけているから成果を上げられたのか、さらに、そのような生徒を授業を通じてどのように育成しているかがいま一つはつきりしていませんでした。しかし、ルーブリックができたことで、育成を目指す資質・能力が見えるようになり、生徒の成長を促す機会を授業でどのようにつくればよいかを考えやすくなりました」

「RGB」を育む授業に
なっているかを教師間で検証

現在は、「RGB」で定めた8つの力を各教科・科目でどのように育んでいくかを、「日田高授業改善実施要領」にまとめている。それには、各単元のどんな授業場面で8つの力を育成するかを教科・科目ごとに示した「RGBシラバス(図2)」や、8つの力の育

図3 生徒を対象とした「日田高RGB」に関する意識調査（抜粋）

	RGB	質問項目 (4: そう思う、3: まあそう思う、2: あまりそう思わない、1: 思わない)	4件法平均値 23年	
			7月	12月
RGBの 資質・能力を 発揮する場面	R	1.この授業では、なぜを考える場面が設定されている。	3.50	3.58
		2.この授業には、疑問を解決するための解決策を考えてみる場面がある。	3.44	3.55
		3.この授業において、自分の仮説・考えが正しいか検証することがある。	3.28	3.42
		4.この授業では、自分の考えを述べる場面があった。	3.41	3.48
RGBの 資質・能力の 高まりの実感	R	13.この授業において、「課題設定力」が高まりましたか。	3.16	3.33
		14.この授業において、「仮説構築力」が高まりましたか。	3.24	3.43
		15.この授業において、「分析検証力」が高まりましたか。	3.26	3.46
		16.この授業において、「論理表現力」が高まりましたか。	3.37	3.45

※学校資料を基に編集部で作成。

成を目的とした授業の実践例が掲載されている。
「各単元で特に意識して育成したい資質・能力を各教科で検討してもらいました。その結果、作成された全教科・

科目の3年間のシラバスを見たところ、1年次は知識活用力や情報活用力の育成を目指す単元が多くなり、3年次は発信力や実践力の育成を目指す単元が多いことが分かりました。「RGBシラバス」によって、3年間を通して「RGB」の育成ストーリーを校内で共有することができました」（遠藤先生）

さらに、日々の授業が「RGB」を育成するものになっているかを教師が検証するため、同校では「見通しを立てた学び」「主体的な問題解決」「社会への提言・繋がり」の3つの視点で授業を評価するためのルーブリックを作成した。そのルーブリックを用いて、1年間に自教科の授業を最低1回、さらに他教科の授業を最低1回参観し、教師間の相互評価を行っている。

「見えない力」を測定する テスト開発に取り組み

「RGB」として設定した資質・能力が生徒に育まれているかを評価するため、生徒に意識調査を行っている。同調査では、8つの力を育む活動が授業中に行われているかを聞いたり、8つの力が自分の中で高まっている実感があるかどうかを「RGBゴール・ル

ーブリック」に基づいて答えさせたりしている（図3）。

また、工藤先生が中心となって、教科を超えて教師が集まり、「RGB」の到達度を測定するテストの開発に取り組んでいる（図4）。回テストは年2回実施している。

「テスト問題の作成にあたっては、過去の生徒たちが取り組んだ探究学習の内容も参考にしています。『どのようにしたら面白い昆虫食になるのだろうか』という問いも、実際に生徒が設定した課題を参考に作成しました。生徒たちが取り組んだ探究学習の内容を振り返ることで、『こんな問いに向き合える生徒を育てたい』『そのためにこんな指導をしていきたい』などと、授業の目標や指導の方向性を定めることができます」（工藤先生）

意識調査で、「RGB」の資質・能力が高まっていると回答した生徒は、大学入学共通テストで好成绩を収める傾向にあることが分かってきた。

「授業の振り返りを『RGB』の視点で書けるようになった生徒の学力が向上していることも実感しています。『RGB』を発揮して、授業で学んだことを自分なりの視点で深めたり、社会課題と関連づけたりすることで、学びがさらに深まっていくのだと思いま

図4 「日田高RGB」測定テストの問題例（1年生）

【課題設定力を測る問題】

問1 以下に示す漠然とした問いを「リサーチクエスチョン（検証できる問い）」として、より深い問いにしたい。あなたならどのように変更するか。なぜそのように変更したのか、その理由も含めて、変更後の新しい問いを書きなさい。

問い「どのようにしたら
おいしい昆虫食になるのだろうか」

※学校資料を基に編集部で作成。

す」（森先生）
「見えない力」を組織的に育み、その成果を検証している日田高校。
「本校では、ペーパーテストで測れる『見える力』を基に生徒を評価してきました。しかし、ペーパーテストの結果は、生徒の真の学力ではなく、テスト対策というその場限りの学習で身につけた瞬間風速的な学力である可能性もあります。そもそも、『見える力』は、生徒が持つ資質・能力の一部でありません。ルーブリックなどを用いて生徒の『見えない力』を丁寧に見ていくことで、生徒の真の学力、姿が見えてくるのだと思います」（高倉先生）

社会で求められる「見えない力」とは。 企業ではどのように育成・評価しているのか

パソル総合研究所 上席主任研究員 **小林祐児**

「社会」に出ると知識・技能を有することは前提として、パフォーマンスや成果を支える「見えない力」が一層求められる。そうした力を企業ではどのように育成・評価しているのか。高校教育が留意すべきことは何か。人材開発や働き方などに関する研究を行うパソル総合研究所上席主任研究員の小林祐児氏に話を聞いた。



パソル総合研究所
上席主任研究員

小林祐児 こばやし・ゆうじ

NHK放送文化研究所 市場調査会社を経て、2015年からパソル総合研究所所属。主な研究領域は、働き方改革、ミドル・シニア層の活性化など。

社会の急速な変化により、「見えない力」が一層重要に

ビジネスシーンでは、実に多様な「見えない力」が求められます。主体的に仕事に取り組み、自分の考えを積極的に提案したり、社内外で状況に合わせてコミュニケーションを取ったり、目標に向かってチームで協働したりする力は、働く上で重要な「見えない力」です（P.26図）。そうした力が備わった人は、仕事で高いパフォーマンスを発揮して成果を出しますし、何より周囲の人たちに「一緒に働きたい人」と思わせる、組織にとって不可欠な人材と言えます。

日本企業では、1970年代に「能力主義」が導入されて以来、一貫して

「見えない力」が重視されてきました。

日本型能力主義は、業務に求められる知識や技術、すなわち「見える力」だけではなく、仕事に取り組む態度や姿勢といった「見えない力」を含めて総合的に人材を評価する考え方です。近年は、産業構造や経済状況の変化によって流動性が高まったことで、欧米型の「ジョブ型雇用」に移行する企業が増えています。ジョブ型雇用では、職務ごとに必要なスキルや経験、資格といった「見える力」が採用や評価の規準として重視されますが、業務の遂行においては「見えない力」が不可欠であること変わりません。

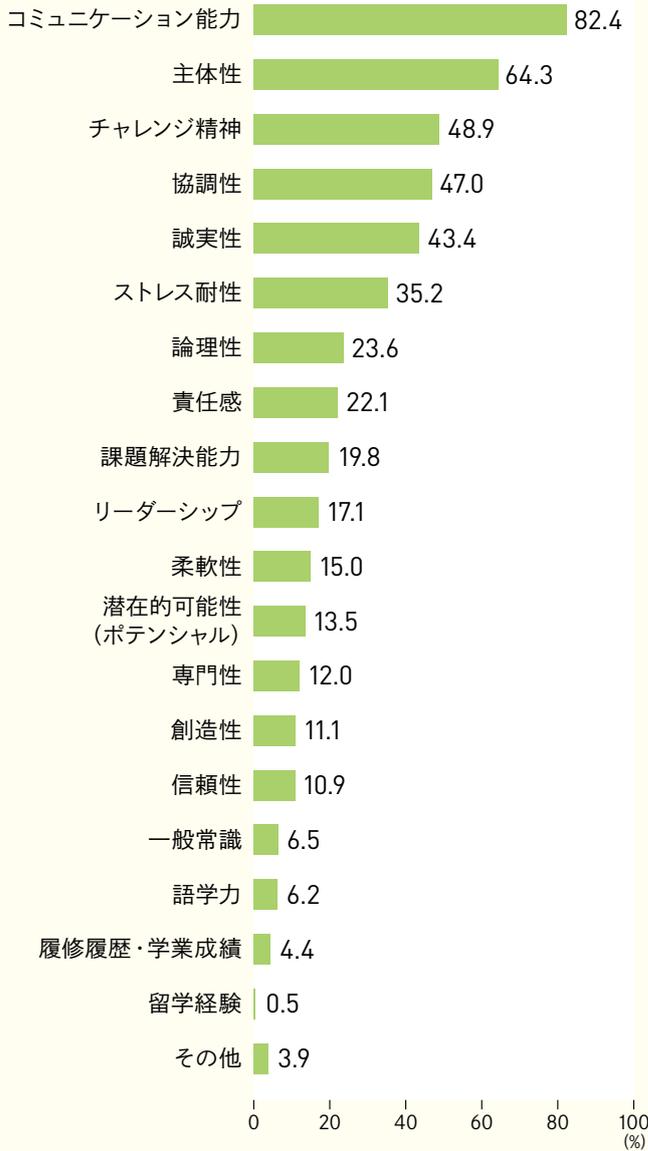
現在の高校生が社会に出る頃には、「見えない力」がますます求められることになると思います。その背景には、

グローバル化、ダイバーシティ化の急速な進展があります。そうした社会の変化に適応するために学び続けたり、多様な価値観やバックグラウンドを持つ人たちとコミュニケーションを取りながら協働したりするには、「見えない力」こそが必要なのです。

様々な手法を用いて 社員の資質・能力を高める

企業が自社の社員に「見えない力」を育成する動きも盛んになってきています。育成の手法は、大きく2つに分けられます。1つは、社員に責任の大きな立場や地位を与えて主体性を引き出す方法です。例えば、プロジェクトのリーダーを任せられることは、プレッ

図 企業が選考・採用にあたって特に重視した点



※選択肢の中から5つを選択。
 ※経団連企業会員 597 社（従業員数 1000 人以上 71.4%、500 人以上 1000 人未満 12.1%、500 人未満 15.7%、不明 0.8%）が回答。
 *一般社団法人 日本経済団体連合会「2018 年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」

シャーがかかる一方で、リーダーシップを發揮してチームをマネジメントしたり、メンバーとコミュニケーションを取って働きやすい環境を整えたりする中で、多くの「見えない力」が磨かれていくことでしょう。そのように、ポジシヨンを与え、その責任や権限にふさわしい力を育成するのです。

もう一つは、一人ひとりの社員が、その人らしさを發揮しやすい環境を社内に整える方法です。例えば、上司と部下が業務上の目標や課題、キャリアなどについて1対1で対話をする「1 on 1 (ワンオンワン) ミーティング」はその一つです。そうしたサポートを通じて部下である社員は、自分の強みは何か、それをどう仕事に生かしていけばよいのか、また、どのような課題に取り組む必要があるのかといったことを意識しながら仕事に臨めるようになります。

外部と連携した学びを導入し、「見えない力」の育成を強化

社員一人ひとりの「見えない力」の發揮を支援する人材育成の手法として、コーポレートユニバーシティ（企業内大学）と呼ばれる、学びのコミュニティを設置する企業も増えていきます。コーポレートユニバーシティは、会社が画的に設けてきた従来の社内研修とは異なり、社員が主体的に学ぶ

場です。その内容は企業によって異なりますが、新たな技術やスキルを身につけるほか、「自分ならできる」といったマインドセットや、批判的思考力などの「見えない力」の育成を目的とする事例が見られます。

コーポレートユニバーシティによる人材育成が効果的な理由の一つとして、普段の職場から離れ、他部門の多様な人たちと学べるといった点が挙げられます。企業によっては、NPO法人や大学などの外部機関と連携することもあります。

人はずっと同じ環境で、同じメンバーに囲まれて過ごしていると、人間関係が固定化されることで、失敗のリスクを恐れ、チャレンジしようとしなくなり、それでは新たな力をなかなか獲得することはできません。普段とは異なる環境に身を置き、普段接している人とは異なる多様な人とかかわる中で、「新しいことに挑戦してみたい」「初めて会った人とコミュニケーションを取るの刺激になる」「自分は別の環境でもやっていける」といった意欲や自信を得て、それが「見えない力」の育成や發揮につながっていきます。

高校で行われている探究学習でも同じ効果が期待できます。校外に出て、地域や企業、大学などの多様な人たち

なぜ育む? 「見えない力」

とかかわる中で、生徒は学校での姿とは異なる一面を見せ始め、様々な「見えない力」を発揮していくことでしょう。教育機関は、企業よりも失敗が許されやすい環境にあるはず。人は「失敗しても大丈夫」と思えてこそ、思い切ったチャレンジができます。先生方には、学校の中に「失敗しても大丈夫」と思える雰囲気をつくり、生徒に多様な経験を多く積ませることで「見えない力」を育み、生徒を社会に送り出していきたいと思っています。

「行動」の変化を促す 具体的なフィードバックが重要

「見えない力」は、それがいつ、どのように発揮されるかは、状況や相手といった、その場の「文脈」に深く依存します。そのため、客観的な根拠を基に行われるべきものである人事査定においては、「見えない力」は評価材料として扱いにくいものです。

それでも、何らかの方法で「見えない力」を「見える化」し、測定することとは、本人の成長を促すという点で意味があります。そのため、1人の社員に対して、上司や人事担当者、同僚、部下などの様々な立場の人が多面的に評価する「360度評価（フィードバ

ック）」という手法を採用する企業は少なくありません。

そのような企業の評価手法は、高校教育にも応用できるのではないのでしょうか。授業や探究学習、部活動、学校行事などの場面で、どういった力を発揮していたかを、複数の教師や生徒、関係者の視点から捉えれば、個々の生徒の力を多角的に評価することがができます。その結果を生徒にフィードバックすれば、「自分はこういう力が強みなのか（足りないのか）」といった気づきを与え、生徒の中に、長所を伸ばして弱点を克服していこうという気持ちが生えるはず。

その際、企業の人材育成においても重視されていることですが、「もっと主体性を発揮しよう」といった抽象的な言葉ではなく、「あの場面では、こう行動するとよかったね」などと、具体的な行動に落とし込んだフィードバックをすると、生徒の今後の行動に変化をもたらすことが期待できます。

企業も学校も、できるだけ多様な環境や人とのかわりを創り、多角的な視点で社員や生徒の姿を捉えて、行動変容をもたらす具体的なフィードバックを行うことが重要です。そうした一人ひとりに合わせた支援が、「見えない力」を育成していくことでしょう。

本特集を振り返って

「見えない力」の見える化は、 生徒を、教師を、そして学校を変える

本特集では、「見えない力」はどのように育成・評価できるのか、「見えない力」を育成する意義は何かといった問いを立て、考えてまいりました。「見えない力」の育成・評価については冒頭の記事で、岡山大学の中山芳一准教授が次のように、そのポイントを挙げられていました。

① 「見えない力」を発揮した生徒の姿を描写し、それを基に「見えない力」を具体的な行動指標として言語化する
② 生徒が「見えない力」を発揮しやすい場面・状況を教師がつくる

③ 生徒と教師による活動の振り返りを通じて、行動指標を生徒が習慣化する
中でも①は、育成・評価に向けた出発点であり、「見えない力」だからこそ重要な視点だと言えます。実際、石川県立金沢泉丘高校は、教師が日々接している生徒の行動を振り返る中で、育

成を目指す資質・能力の「実行力」「自走する力」の具体化を図っていましたし、大分県立日田高校も、育成を目指す「8つの力」が発揮される時の生徒の姿をルーブリックで示していました。

客観的に評価・測定することが難しい「見えない力」ですが、それは評価・測定する意味がないということではありません。①のように見える化して評価・測定した結果を基に、③のように活動を振り返ることで、生徒にとっては今後の学習や行動の改善に、教師にとっては指導や支援の改善につながる、形成的評価として大きな意味を持ちます。実践事例に共通して感じたことは、「見えない力」の向上は、生徒の生き方、あり方をよりよいものへと変える、ウエルビーイングの実現に寄与するということです。そのような生徒の姿を見た教師は、自身の生徒観、教師としてのあり方を更新し、それが新しい学びの創造を学校にもたらしていました。

そのように、「見えない力」の育成は、生徒の変容にとどまらない意義を持つものと言えるのではないのでしょうか。



VIEWnext
編集部
統括責任者
柏木 崇

主体的・
対話的で
深い学び

授業実践

日本史

生徒の問いを
起点とする学習で、
自分で学ぶ力を育む

栃木県・私立宇都宮文星女子高校

篠原孝文 しのはら・たかふみ

同校に赴任して25年目。
学習指導部部長。地理歴史科(日本史)。



学校概要

◎設立 1929(昭和4)年 ◎形態 全日制/秀英特進科、普通科、総合ビジネス科/女子校 ◎生徒数 1学年約180人
◎2023年度卒業生進路実績 国公立大は、宇都宮大、新潟大、横浜市立大、山梨県立大に4人が合格。私立大は、自治医科大、駒澤大、東洋大、明治学院大、立教大、立命館大などに延べ93人が合格。短大・専門学校進学86人。就職47人。

私が
目指している
授業

常に変化する社会では、明確な正解がないため、自分に必要なことを自分で学び続ける力が求められます。しかし、以前の本校の生徒には、何事にも受け身的な傾向が見られました。そこで3年前、授業に自由進度学習と探究的な学習を取り入れることにしました。他校を訪問して見学した授業や外部のセミナー、小・中学校の実践などを参考にブラッシュ・アップを重ね、現在は、単元で扱う歴史的な事象などについて個人・グループで学び、そこで出た疑問を基に各自で問いを立て、調べて分かったことをまとめる課題を出しています。歴史的な見方・考え方が身につくよう、問いを立てる際には歴史的な事象の比較・対比や因果関係などに着目させることも大切にしています。

授業レポート

本時の概要

- [対象] 2年生 [教科・科目] 地理歴史科・日本史探究
[単元] 律令国家への道(大化の改新～持統朝)
[単元目標] 律令国家に向けて、どのような国を目指したのか、何が起きたのかを理解すること。それらにかかわる人物や歴史的事象に関心を持つこと。
[授業時数] 全3時間のうちの2時間目



単元の指導計画は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。 <https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/> または右の2次元コードからアクセスしてください。



ウェブサイトVIEWnext ONLINEでは、授業のダイジェストを動画で紹介!



お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

1 本単元の目標と課題を確認 10分間



初めに篠原先生は、本単元の目標や評価の観点などをまとめたスライドを生徒の端末に配信。それをモニターに映しながら、飛鳥時代後期に関する問いを各自で設定し、調べた内容をスライドにまとめる本単元の課題について説明した。5W1Hの観点が問いの設定に生かせることなども併せて伝えた。

2 問いを立てるための調べ学習 15分間



前時に続き、生徒は自分が選んだ方法で学びを進めた。大半の生徒は、プリントに示された「大化の改新は何を目指したのか」「天武天皇は何をしたのか」などの設問に対して、教科書やインターネットを使って分かったことをまとめた。学習用動画を視聴して、気づいたことを話し合ったグループもあった。

3 各自の問いに基づいた調べ学習 15分間



生徒は、「持統天皇は女性なんだね」「当時の天皇になるための条件は何だったのだろうか」と感想や疑問を出し合った。篠原先生は教室を回り、生徒の質問に答えたり、調べ学習の参考になる動画サイトを紹介したりした。問いを立て、調べた内容をスライドにまとめ始める生徒もいた。 ©Canva

4 自分の問いを他の生徒と共有 10分間



生徒は、自分が立てた問いを周りの生徒と伝え合った。篠原先生は、「まだ問いを立てられていない人は、友だちが立てた問いを参考にしましょう」と助言。最後に、大化の改新と壬申の乱についての理解度を4段階で自己評価し、分かったことや疑問点、自分が立てた問いを振り返りシートに入力した。 ©Google

発問・課題設定の観点

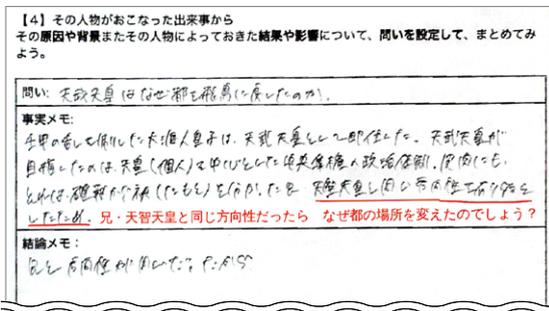


単元目標に沿った
問いを立てられるよう
着目してほしい点を示す

授業では、私が講義をすることはなく、生徒は自分で問いを立て、それを追究し、分かったことをまとめる課題に取り組みます。何を、どのような方法で調べるか、1人で、あるいは誰かと取り組むのかなどは、生徒が自分で決めて進めます。

漫然と教科書を読むだけでは疑問は出てこないで、生徒が問いを立てる際のヒントとなるよう、学習する単元で着目してほしい点を示したプリントを配布しています。例えば、飛鳥時代後期を扱った本単元では、大化の改新や壬申の乱に関する問題を出し、それを解く中で基礎知識を得られるようにしました。その上で、「それぞれの人が何を指摘したのかを比較しよう」「いつ、どこで、誰が、何のために、何を、どのようにしたのか、5W1Hで整理してみよう」などと声をかけ、歴史的な見方・考え方を働かせることを促しました。

図1 本単元のプリント 生徒の問いの記入例



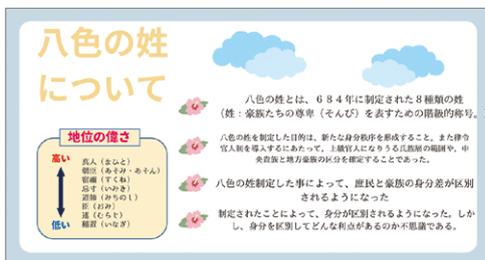
生徒が立てた問いに対して、篠原先生がコメントを記入し、調べ学習がより充実するようにしている。 ※学校資料を抜粋して掲載。

生徒が立てる問いは、学習する単元で扱う時代のことであれば何でも構いません。的外れな問いであったとしても、否定はせず、着眼点を褒めながら、その問いを生かして再考できるように助言しています(図1)。

また、自分で問いを立てることが難しい生徒が、ほかの生徒の問いを参考にすることができるよう、生徒同士で問いを伝え合ったり、問いを振り返りシートに入力して共有したりしています(P.31コラム参照)。

本単元では、「なぜ、飛鳥に都を移したのか」「なぜ、八色の姓を定めたのか」など、様々な問いが生まれました。

図2 生徒が作成したスライド(例)



スライドはオンラインのデザインソフトを使って作成する。生徒がどんな問いを立て、どのようにまとめているのか、生徒同士で見合えるようにしている。 ※学校資料をそのまま掲載。

中でも評価で大きなウエートを占めるのは、各単元で作成するスライド(図2)などの成果物です。事前に生徒に提示した規準(図3)で評価します。

知識・技能については、生徒が自分で習得することができるよう、該当単元の基礎知識をまとめたオンラインのドリルを配信しています。その中から選択肢の順序を変えて問題を出す約10分間の小テストを、実施日を予告した上でを行い、評価の材料にしています。ドリルは何度も取り組める仕様で、生徒が正解するまで粘り強く取り組んでいるか、学習の過程が分かれます。その履歴は、主体的に学習に取り組む態度の評価の1つにしています。

学習評価の工夫

定期考査に加え、
提出物や小テストなど、
普段の取り組みも重視



図3 スライドの評価の規準

知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> テーマの内容について、正しい内容で、きちんと説明がされている。
思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none"> テーマに関して、理由や結果などについて、自分の考えが書けている。 テーマについて、見る側を意識した整理・表現ができています。
主体的に学習に取り組む態度	<ul style="list-style-type: none"> 独自の問いの設定・整理ができている。 自分なりのまとめ方ができている。

※学校資料を基に編集部で作成。



生徒が自分で学びを進めるための工夫

生徒の大半は、私の授業で初めて自由進度学習を経験します。そこで、次の点に留意しています。

● **毎授業、単元目標や課題、提出日などを確認**

毎授業の冒頭に、単元目標や課題の内容、提出日などを伝え、生徒がすべきことを確認できるようにしています。加えて、ラーニング・ピラミッド(*)を示し、ほかの人と話し合ったり、教えたりすると学習内容が定着しやすいことを伝えています。

● **1単元で扱う学習範囲を狭くする**

学習範囲が広いと、扱う歴史的事象や人物が多くなり、問いを立てづらいのではないかと考え、1単元を教科書の1節分とし、3〜4コマで完結させています。

● **学びの参考になることはどんどん共有**

生徒が学習している間、私は教室内を回り、生徒が見ているウェブサイトや友人に質問した内容などを口頭で全体に共有し、生徒に参照するよう促しています。

授業の最後には、本時の学習を通じて気づいたことや立てた問いなどを、生徒同士で伝え合う時間を設けています。振り返りシートはオンライン(下図)にし、生徒が互いのシートを見られるようにしました。また、授業後、振り返りシートで生徒の進捗を確認し、私が個別に助言したり、全体指導に生かしたりしています。

● **問いはほかの生徒と同じでも構わない**

生徒が立てる問いは、他者と同じでもよいことにしています。大事なのは、立てた問いを自分で調べる過程であり、そこで自分なりの気づきを得たり、疑問を持ったりすることを期待しています。

● **「分からないこと」を大切に**

「分からないことは周りに聞こう」と伝えています。質問を恥ずかしがる生徒もいますが、分からないことをそのままにせず、知りたいと思って周りに聞くという行動変容が、主体的な学びには重要だと考えています。

■ **オンラインの振り返りシート(抜粋)**

※学校資料を抜粋して掲載。©Google

①事実把握・進み具合は？ 理解できた？					気になったこと、疑問、メモしてみよう	確認コメント	課題設定・問いづくり 誰にした？どんなテーマ？	
No.	大化の改新 乙巳の夜のこと	壬申の乱① 中大兄皇子のこと	壬申の乱② 天武天皇のこと	壬申の乱③ 持統天皇のこと			選んだ人物	問い・テーマ
10	よくわかった	だいたい大丈夫	だいたい大丈夫	だいたい大丈夫	大化の改新の理由を改めて知った。	なぜ、改革をしたのかという目的が大切ですね。	中大兄皇子	なぜ天皇中心の国家を作ろうとしたのか
11	だいたい大丈夫	だいたい大丈夫	ちょっと不安	ちょっと不安	八色の姓を制定して貴族の身分秩序を再編成しようとした	それまでがどうだったか、という視点もあると良くなると思います。	天武天皇	八色の姓について
12					蘇我氏について少し知ることができた。	蘇我氏のどんなことがわかりましたか？どんな印象を持ったでしょうね。	蘇我氏	蘇我氏はどうして殺されたのか
13					持統		持統天皇	持統天皇はどんな人

本単元のプリントの「事実を確認」の4項目について、「よくわかった〜不安」の4段階の中から自分の理解度をプルダウンで選択

疑問や気づきなどを

自分が立てた問いを入力

「ちょっと不安」や「不安」を選択した生徒が多ければ、授業中に5〜10分程度、篠原先生が該当部分を解説する。場合によっては、繰り返し復習ができるよう、解説の動画を作成して配信する。

生徒が気づきや疑問から、さらに考えを深められるよう、篠原先生がコメントを入力。

振り返りシートはクラス全体に公開しているため、ほかの生徒の問いを、自分の問いづくりの参考にすることができる。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

成果と展望

数か月でも
徐々に自分なりの
学びの形を見いだし始める



2年生は、今年度の4月から今の授業形態で学習に取り組んでいます。授業中の様子や提出物を見ると、生徒は、自分なりの学びの形を見つけたり、まとめ方を工夫したりするようになってきています。前の単元では、「古墳時代の家と現代の家の違い」「法隆寺はなぜ地震に強いのか」などと、独自の視点で問いを立てた生徒がいました。教科書通りではなく、自分の考えを反映できる余白があることは、生徒の豊かな学びにつながると思っています。

一方で、授業中に日本史と関係のないことをしてしまったり、表面的な問いにとどまってしまうたりする生徒もいます。生徒が取り組みたい課題をどう設定するか、どうすれば深い問いを立てられるようになるのかなど、授業研究をさらに重ねていきたいと思っています。

* アメリカ国立訓練研究所が研究結果として発表した、学習方法と平均学習定着率の関係をピラミッド型で示したものの。

主体的・
対話的で
深い学び

授業実践

情報

データを基にした試行錯誤で、
情報を批判的に捉えて
考察する力を鍛える



ひばりがおか
兵庫県・私立雲雀丘学園中学校・高校

林 宏樹 はやし・ひろき



同校に赴任して3年目。数学科。情報科。
高校3学年担任。

学校概要

- ◎設立 1950 (昭和 25) 年 ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約 275 人
- ◎2023 年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、東北大、京都工芸繊維大、京都大、大阪大、神戸大、大阪公立大などに 92 人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、近畿大、関西学院大などに延べ 637 人が合格。

私が
目指している
授業

本校の生徒の多くは、社会の様々な課題を、当事者意識を持って考えることが苦手で、失敗を恐れる傾向があります。そこで授業では、生徒がデータを見て自分で問題点を見だし、解決策を考え、それを見直して改善するといった試行錯誤に取り組ませています。その過程では、生徒は探究のフレームワークである「PPDAC サイクル」(*1)を経験し、データを基に、根拠を持って分析・考察することを学びます。そして、自分で出した結果を客観視できるよう、生徒同士で相互評価をさせますが、相互評価の活性化のためには、生徒が批判を恐れずに発言し、他者の発言に耳を傾けることが重要です。私は生徒のどんな発言も受け止め、安心・安全な場づくりも図っています。

*1 Problem (問題)、Plan (計画)、Data (データ)、Analysis (分析)、Conclusion (結論) の5段階のフェーズに沿って統計学を用いて問題解決を行うためのフレームワーク。

授業レポート

本時の概要

[対象] 2年生 [教科・科目] 情報・情報I [単元] データの活用
[テーマ] 相関分析の探究事例、統計グラフポスターの製作
[単元目標] データの活用で学習した知識・技能を用いて、課題設定、データ収集、分析、考察を行う探究学習を実施し、知識・技能を定着させるとともに、思考力・判断力・表現力を養う。
[授業時数] 全8時間のうちの7時間目



単元の指導計画は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。<https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/>または右の2次元コードからアクセスしてください。



ウェブサイトVIEWnext ONLINEでは、授業のダイジェストを動画で紹介!



お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

1 本単元の目標を確認

🕒 5分間



林先生は、単元末の課題である統計グラフポスターを製作する上で重要なポイントを、先生自作の「探究マップ」(P.35コラム参照)を示しながら説明。本時は、前時に取り組んだ相関分析の結果をまとめたスライドを題材に、データの分析結果を考察する際に重要な観点を確認すると伝えた。

2 相関分析の結果を考察①

🕒 15分間



ある生徒が相関分析をした「47都道府県における睡眠時間・休養・メディアと仕事時間」の結果をまとめたスライドを提示。まず個人でスライドを見て、データの表示形式や分析・結論に関するよい点や疑問点などを端末に入力した。次に、班ごとに各自の気づきを話し合い、問題点を整理した。

3 考察結果をクラス全体で共有

🕒 15分間



各班が考察した結果をそれぞれ発表した。ある班が「『相関がない』と書いてあるが、相関係数が0.52なので相関はある」と発言すると、林先生は「相関係数の値だけで相関があると判断してもよかったかな?」と指摘。散布図と相関係数で相関の有無を判断する必要性を確認した。

4 相関分析の結果を考察②

🕒 15分間



次に、別の生徒による「都道府県別の1世帯あたりの米の年間支出額と食料の関連」のスライドを示し、林先生は「2つのスライドには共通して不十分な点があるが何か」と発問。その後、生徒が見つけれなかった地域別の考察がない点に林先生が言及。「分析するデータの本質や背景を忘れないように」と伝えた。

発問・課題設定の観点



生徒の分析結果を
題材に疑問点を出し合い、
自分の製作物の評価と改善を促す

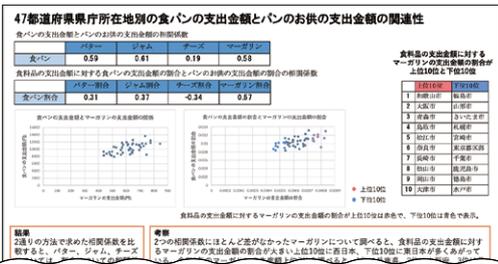
「データの活用」を扱う本単元では、表計算ソフトの技能を身につけるとともに、様々な分析法を学びます(図1)。それらを活用する機会として、前時は、生徒各自が持っている問題意識に関連したデータをオープンデータから収集し、相関分析などの結果と考察をスライドにまとめる課題を出しました。そして本時は、生徒が製作したスライドのうち、2つを取り上げ、グラフを適切に表現できているか、分析や考察の

内容は妥当かを考えさせました。自分の製作物を客観的に見ることは難しくても、他者の製作物であれば客観的に見やすいものです。生徒は提示されたスライドを見て、「外れ値がある」「相関があるのに『ない』と書いてある」などと問題点を指摘していました。それらが批判で終わらないよう、「自分ではできているか」と問いかけ、生徒が自分の製作物を自己評価して、次時に行うスライドの改善につながるようにしました。どの単元でも、まずは学んだことを実践し、PPT・DCAサイクルが回るよう指導しています。生徒が批判的な視点を持って問題発見と修正を繰り返し、活用力や考察力が育まれるようにしています。

図1 本単元の指導計画(概要)

- 1 **オリエンテーション、事前調査**
単元の目標や進め方、単元末の課題となる統計グラフポスターについて説明。
- 2 **事前調査**
ウェブサイトにて統計グラフ全国コンクールの受賞作品を閲覧して分析するとともに、表計算ソフトの技能テストを実施。
- 3~5 **表計算ソフトの技能演習1~3**
表計算ソフトの関数を学び、棒グラフや箱ひげ図などを作成。四分位範囲、外れ値、度数分布表、ヒストグラムなどを学ぶ。最後に、大学入学共通テスト形式の「データの活用」の問題に取り組む。
- 6 **相関分析の演習**
相関分析の説明動画を視聴。オープンデータからデータを収集し、相関分析や回帰分析の演習に取り組む。生徒は自分が問題意識を持っている事柄に関するデータを収集し、期日までに相関分析の結果と考察をスライドにまとめて提出。
- 7 **相関分析の結果を題材にした演習(本時)**
生徒が製作したスライドのうち、2つを取り上げ、よい点・疑問点などを班ごとに議論。議論の結果を全体で共有して、分析方法を整理する。
- 8 **統計グラフポスターの製作準備**
各自、6で製作したスライドを見直し、改善して再提出するとともに、夏季休業中に製作する統計グラフポスターの題材を検討。
※学校資料を基に編集部で作成。

図2 生徒が製作したスライド 2回目の例



ある生徒は2回目に製作したスライドに、所在地別のランキングなどを基にした考察を加えた。※学校資料をそのまま掲載。

図3 スライドの評価指標(抜粋)

- A **ソフトウェア技能力(6段階)**
 - A1 グラフを1つも作成していない(中略)
 - A6 適切なグラフを4つ以上作成している
 - チェックリスト(4段階)**
 - A7 グラフのタイトルは適切に記載できているか(中略)
 - A10 統一して相関係数を四捨五入できているか
 - B **分析力(5段階)**
 - B1 相関を活用していない(中略)
 - B5 複数の相関を比較して判断している
 - C **思考的活動力(6段階)**
 - C1 結果、考察ともに記載がない(中略)
 - C6 結果が記載され、適切な思考・判断を含めた考察を記載している
- ※学校資料を基に編集部で作成。

学習評価の工夫



スライドの
改善状況から、主体的に
学習に取り組む態度を評価

知識・技能は表計算ソフトの技能テスト、思考・判断・表現は2回製作する相関分析のスライド(図2)などを材料にして評価します。主体的に学習に取り組む態度は、スライドを2回提出することを生かし、その改善状況を評価材料にしています。表計算ソフトの技能テストは、単元の最初に行います。そして単元末に、散布図の作成や相関係数の算出

などのテストを行い、学習内容の定着度を測ります。生徒が製作するスライドは、事前に設定した評価指標(図3)を基に評価します。生徒にはスライドに必要な要件は伝えますが、評価指標自体は提示しません。評価指標を単になぞるのではなく、学習内容をしっかり活用してスライドの製作に取り組んでほしいからです。定期考査では、知識・技能の問題と、大学入学共通テストの問題と似た形式の問題を出します。大学入学共通テストは思考力等が問われる問題が中心であるため、大学入学共通テスト対策に特化した問題集(※2)に取り組みませ、その類似問題を定期考査で出しています。

* 2 ベネッセが提供する、大学入学共通テストに向けた「情報1」の問題集「進研 WINSTEP 情報1」。



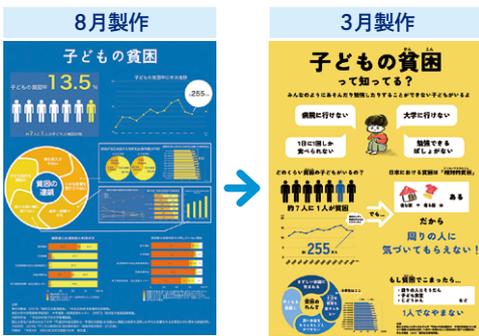
年間を通じて、生徒が試行錯誤する工夫

「情報Ⅰ」年間指導計画

時期	単元
1学期	(1) 情報社会の問題解決 (4) データの活用
8月	統計グラフポスターの製作
2学期	(3) コンピュータとプログラム (4) 情報通信ネットワーク
3学期	(2) コミュニケーションと情報デザイン
3月	統計グラフポスターの製作

※学校資料を基に編集部で作成。

ある生徒が製作した統計グラフポスター（例）



8月に製作したポスターを3月に再製作

「情報Ⅰ」の年間指導計画は、最終成果物と学習プロセスを検討して立てました（左図上）。1学期は、特定の問題の解決に向けてデータを活用するための知識・技能を学んだ後、統計グラフポスターを製作します。2学期は、プログラミングなどに取り組む中でデータの収集や分析の方法を学習します。そして3学期は、意図に応じて情報を表現するデザインの知識・技能を学んでから、再度、統計グラフポスターを製作します。

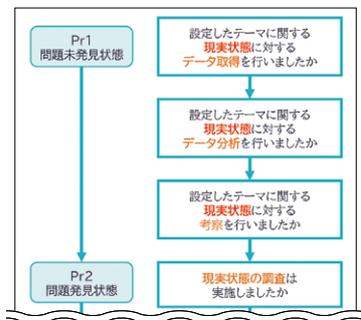
2回目のポスター製作までの授業などで、生徒は様々なことを学びます。大半の生徒は、1回目に製作したポスターの稚拙さに気づき、新たにデータを収集したり、分析や考察を加えたりして、より質の高いポスターに改善していきます（左図下）。1度製作したものを見直し、改善する機会を設けることで、生徒の成長を促すことができると感じています。

子どもの貧困をテーマにした生徒は、小学生をメインターゲットとして2回目のポスターを製作。掲載する情報を取捨選択し、視覚的にも訴えかけるものにしようと、イラストを加えるなどの修正を行った。※学校資料をそのまま掲載。

「探究マップ」で進捗を自己管理

生徒が学習の進捗を自分で確認できるよう、PPDACサイクルの各フェーズにおけるチェック項目を図式化した「探究マップ」（右図）を作成し、生徒に渡しています。次のフェーズに進むためには、何に取り組みればよいか分かり、学習全体の流れを見通すことができます。統計グラフポスターの製作では、生徒が進捗を自己管理するツールとしても活用しています。

「探究マップ」(抜粋)



Problem（問題）のフェーズでは、「Pr1 問題未発見状態」から「Pr7 解決策の提案可能状態」までを設計。問題を見出す手順が示されている。

※学校資料をそのまま掲載。

成果と展望

自分の学力を
データを踏まえて
捉えられるように



PPDACサイクルを活用した授業によって、生徒は与えられた情報をうのみにせず、情報を客観的に捉えられるようになってきたと実感しています。例えば、自分の成績を「よい・悪い」のみで表現していた生徒が、3年生になると「模擬試験の合計点が○点で、数学が○点だった。目標点に○点足りないの、○○分野で○点伸ばしたい」などと、データを基に自分の弱点を分析し、その後の学習に生かすようになります。データというものは、そのままでは単なる数字に過ぎず、分析によって「情報」となり、普遍化すれば「知識」に、自分なりの考察を加えると「知恵」にもなります。データに意味づけをして活用できるようにすれば、より豊かな人生を送ることができると、生徒に実感してもらえる授業を、これからも模索していきます。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

自然環境の問題に取り組む企業の 生の声が、生徒が考えを深めるきっかけに 神奈川県立横浜緑ヶ丘高校

生徒の目が社会に向くよう、企業と連携
神奈川県立横浜緑ヶ丘高校

専門家として実験等を助言
株式会社オオスミ



やすだ なおき
保田直樹

同校に赴任して7年
目。研究グループ。

たぐち ゆき
田口由紀

同校に赴任して5年
目。総括教諭。運営
グループ（進路）。

よしむら けんじ
吉村憲二

同校に赴任して9年
目。総括教諭。研究
グループ。



すずき けいた
鈴木圭汰

法令等に基づき土壌や大気などの
調査・測定・分析を行う同社（本社：
横浜市）で、「水」を扱う。2022
年度から「緑の探究I」に参画。



業務では、工場排水や公共用水などを採取
し、水に含まれる成分の測定・分析等を担
当。大学時代は化学分析を学んだ。

〈横浜緑ヶ丘高校の探究学習〉 2022年度、スーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）の指定を受け、科学的探究力を備えた人材の育成を目指し、学校設定科目「緑の探究I～III」を軸に探究学習を実施している。1年次の「緑の探究I」では、学校が海に近いことから、「水」を共通テーマとし、企業等の外部機関から課されたミッションを基に各チームで課題を設定。企業等から対面やオンラインで助言を受けながら、仮説を立て、それを検証する調査・実験を行い、分析結果をまとめ、発表する。2・3年次は、生徒各自の関心に基づいて課題を設定し、個人探究に取り組む。



つながりの目的

企業がミッションを提示。

生徒が社会とかわる活動に



吉村 本校は、未来の社会を創る人材の育成を教育目標としています。その実現

のためには、生徒が高校時代から社会とかわる必要があると考え、2021年度に探究学習を見直しました。企業等から社会問題に関するミッションを課してもらい、生徒が問題の解決策を考えて提案する活動としました。

21年度は、企業等に数回来校していただき、生徒の提案は実現可能か、別の見方・考え方はないかなど、専門家の立場で生徒に助言していただきました。社会問題の解決に取り組む人の声は、生徒に大きな刺激を与え、生徒は次第に社会に目を向けるようになっていき、それにより視野が格段に広がりました。「自分のアイデアが社会貢献につながるかもしれない」といった思いが生徒に芽生え、探究学習に主体的に取り組むようになっていったのです。

22年度に指定されたSSHも企業連携を探究学習の軸に据えました。既に連携していた企業からご紹介いただいたオオスミに、1年次の「緑の探究I」を支援していただくことになりました。

探究学習にこうかかった……

現場で使っている知識・技術を基に、実験方法などを助言



鈴木 当社は、環境調査・測定・分析の専門企業で、自然環境の保全活動にも

力を入れています。私は工業排水や河川などの水の測定・分析を担当しており、高校生と年齢が近いこともあって、同校の探究学習の支援に立候補しました。横浜市の未来を担う高校生と、同じ目線の下、環境問題について考えることができるのではないかとといった期待を持ちながら支援を始めました。

22年度の活動のミッションは、上司たちと検討した結果、「横浜市を日本で一番水がきれいな街にするには」としました。横浜市とすれば、生徒が環境問題を自分事として捉えることができ、「日本で一番」とすれば、他地域と比較して横浜市の水問題を見いだせると考えたからです。実際、生徒は自身が住む横浜市内の複数の川で水質調査をしたり、洗剤の環境への影響を分析したりと、自分に引き寄せて水問題について探究する姿に手応えを感じました。活動の中で、設備や時間の問題から実験が難しい仮説を立てるチームもあ

りました。その場合は、仮説の根底にある思いを聞き出し、それを実現できない別の実験を提案するなどしました。

22年度は同校に5回伺いましたが、会う度に生徒から新たなアイデアが出たり、私の前回の話を基に活動していたりと、生徒の変容を目のあたりにして、私は同校の探究学習のファンになりました。高校生だからこそ持っている問題意識を引き出し、私が現場で使っている知識や技術を生徒に伝えて、インターネットや書籍で調べても出てこないような探究学習になるよう、今後も支援していきたいと思っています。

今後の探究学習を展望する……

企業との連携の継続と探究学習の充実の両立を図る



田口 同じ企業の人と1年間継続してかわかること

で、生徒は企業がどのような仕事や研究をし、社会貢献に取り組んでいるのかを具体的にイメージすることができるようになりました。企業についてもっと知りたいという生徒も出てきています。インターンシップなど、生徒が自分のキャリア観を深められる活動ができればと考えています。

つながりのPoint

学校と企業の率直な対話が探究学習をよりよくする

鈴木さんも学校との連携は初めてで、1年目は試行錯誤の連続だった。2年目は1年目の経験を踏まえて、支援の見通しを立てていたが、活動の順序や訪問の時期などが1年目とは異なることに、活動が始まってから気づいた。「生徒にアドバイスをする機会を逃してしまいました。校内の状況は外部の人間には分からないので、計画や進捗は適宜共有してほしいと学校へお願いしました」と鈴木さん。保田先生は、不備を率直に指摘してもらえてよかったと言う。「企業への負担を考えて、私たち教師は遠慮しがちでしたが、かえってそれは企業にとって負担をかけることになってしまいました。学校と企業の率直な対話は生徒の活動の充実にもつながると考え、その後は情報共有を適切に行うようにしています」(保田先生)



写真 企業等からの専門的な助言があることで、実験や調査はより充実する。その点でも、企業等と進捗を共有することが大切だと、保田先生は語る。



保田 24年度は「緑の探究1」を見直し、水に関する関心や問題意識が似ている生徒同士でチームを組んで課題を設定し、企業には支援できそうなチームを選んでもらう形にしました。以前の手法では、どのチームも同じような課題を設定することになってしまったためです。企業には事前に趣旨を説明し、理解していただきました。

企業の来校日は、担当チームとの顔合わせと発表会の2日間にしました。顔合わせの時に、企業の方に業務内容やその仕事に就いた理由などを話していただくことで、生徒と企業の距離が縮まれば、その後はオンラインでも話しやすいのではないかと考えたからです。企業等が負担なく生徒と交流し、学校も探究学習を充実させる方法を、本活動にかかわる全員で模索していきます。

学校概要

設立 1923 (大正12) 年
形態 全日制/普通科/共学
生徒数 1学年約280人
2023年度卒業生進路実績
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京学芸大、東京工業大、東京大、東京農工大、一橋大、横浜国立大、京都大、東京都立大、横浜市立大などに62人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ1050人が合格。

事例で深める!

学習評価

実践校の取り組みを基に、
学習評価をより充実させるポイントを
田村先生がアドバイス

千葉県立千葉北高校

教科の評価規準を基に、 科目・単元の評価規準も作成

「7つの北高力」と「資質・能力
の3つの柱」をひもづける

解説者



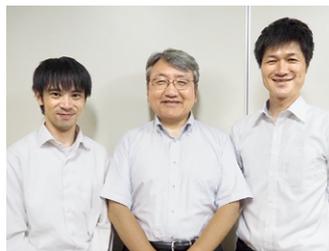
文部科学省 初等中等教育局
主任視学官
田村 学 たむら・まなぶ

専門は教科教育学、教育方法学、カリキュラム論。文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官、國學院大學教授などを経て、現職。著書に、『学習評価』（東洋館出版社）など多数。

田村 貴校の学習評価に関する記事（*1）を拝見しました。評価規準を丁寧に作成されていますね。
森谷 本校では、ブランドデザイン（以下、GD）の中で、育成を目指す資質・能力「7つの北高力」を掲げています。授業でもそれらを育成するため、「資質・能力の3つの柱」とひもづけました（図1）。そして、学習指導要領に示されている教科の目標と「7つの北高力」の評価規準、本校の生徒の実態などを踏まえて各教科の評価規準を作成し、それを基に、各科目と各単元の評価規準も作成しました。

勝田 先生方が安心して学習評価を行えるよう、いずれも本校としての評価の論拠となるGDを踏まえた評価規準とし、生徒や保護者に説明責任が果たせる状態にしました。
田村 「7つの北高力」と「資質・能力の3つの柱」をひもづけた点は、素晴らしいですね。単元の評価規準にまで「7つの北高力」が入っていることで、先生方はそれを意識して授業をするはずですよ。
鈴木 数学科では、例えば「主体的に学習に取り組む態度」は、自己改善ができることをA基準として評価規準を設定し、振り返りなどを授業に取り入れました。
田村 1つの資質・能力を複数の柱にひもづけがちですが、貴校の

千葉県立千葉北高校プロフィール



左から／鈴木淳和（教務主任、数学科）、勝田幸裕（校長）、森谷一雅（3学年主任、理科 [生物]、教務部）

設立 1975（昭和50）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約320人
2023年度卒業生進路実績 国立公立大は、茨城大、千葉県立保健医療大に3人が合格。私立大は、青山学院大、学習院大、駒澤大、成蹊大、成城大、東京理科大学、東洋大、法政大、明治大などに延べ462人が合格。

ように1つの柱にひもづける方が生徒にとっても教師にとっても分かりやすいと思います。

教科間で評価規準を見合い、 よい点を学び合う

森谷 現在の課題は、評価がAに偏っている教科や、Bが極端に多い教科があることです。

田村 教科間で評価規準や評価方法を比べてみましょう。例えば、数学科では思考の深まりの違いでAとBの差をつけていますが、理科で

*1 同校の学習評価に関する取り組みは、本誌2022年度2月号の特集で紹介しています。ウェブサイト『VIEW next ONLINE』の「高校版バックナンバー」（<https://view-next.benesse.jp/view/bkn-hs/article14278/>）、または右の2次元コードからアクセスしてください。



図1 教科・科目・単元の評価規準の作成手順

- 育てたい生徒像と、自校で育成を目指す資質・能力を検討し、「7つの北高力」とそのルーブリックを策定。
- 「7つの北高力」と「資質・能力の3つの柱」をひもづける。
- 各教科で3つの観点の評価規準を、下記の資料を基に作成。A（十分満足できる）を規準とし、Aを基にB（おおむね満足できる）を、Bを基にC（努力を要する）を考える。
資料・学習指導要領
 - 文部科学省「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」の別紙5
 - 文部科学省国立教育政策研究所「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」（各教科のもの）
 - グランドデザイン、「7つの北高力」の評価規準 ・教科で育成したい資質・能力
- 各教科で、③で作成した教科の評価規準を踏まえて、科目の評価規準を作成。
- 科目のシラバスを作成。その際、科目の評価規準を基に、単元の評価規準を作成。

資質・能力の3つの柱	7つの北高力
知識・技能	徹底力、課題発見力
思考力・判断力・表現力等	思考力、実践力、創造力
学びに向かう力、人間性等	協働力、自己改善力

「7つの北高力」の一つひとつを「資質・能力の3つの柱」のいずれかにひもづけることで、自校で育成を目指す資質・能力を意識した授業づくりを実現。

図2 「数学C」と「生物基礎」の評価規準 思考・判断・表現の例（*2）

「数学C」複素数平面、式と曲線

評価規準	
思考・判断・表現 (思考力、実践力、創造力)	A 複素数平面における図形の移動などに関連づけて、複素数の演算や累乗根などの意味を考察でき、軌跡の考え方をを用いて、放物線、楕円、双曲線の方程式を導くことができ、2次曲線と直線の共有点を連立方程式の解と捉え、共有点の個数について考察し、問題解決に活用できる。
	B 複素数平面における図形の移動などに関連づけて、複素数の演算や累乗根などの意味を考察することができ、軌跡の考え方をを用いて、放物線、楕円、双曲線の方程式として考えることができ、2次曲線と直線の共有点を連立方程式の解と捉え、共有点の個数について考えることができる。
	C 複素数平面における図形の移動などに関連づけて、複素数の演算や累乗根などの意味を考察すること、軌跡の考え方をを用いて、放物線、楕円、双曲線の方程式として考えること、2次曲線と直線の共有点を連立方程式の解と捉え、共有点の個数について考えることに、努力を要する。
評価方法	定期考査（思考力を問う問題）

青色の下線は、A・B・Cで文言が異なる箇所。

「生物基礎」生物の特徴

評価規準	
思考・判断・表現 (思考力、実践力、創造力)	A 生物の特徴について、問題を見だし、見通しを持って観察、実験などを行い、得られた結果を分析し、多様な生物が持つ共通の特徴を見いだして表現するなど、科学的に探究している。基礎的な知識を材料にグラフを読み取り、考察したり、探究的な問いに答えたりすることができる。
	B 生物の特徴について、観察、実験などを行い、得られた結果を分析することができる。基礎的な知識を材料にグラフを読み取ったり、標準的な問いに答えたりすることができる。
	C 生物の特徴について、観察、実験などを行うことや、得られた結果を分析するための努力を要する。基礎的な知識を材料にグラフを読み取ったり、標準的な問いに答えたりするための努力を要する。
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> 定期考査（思考力を問う問題）：配点40点 考査実験レポート：配点5点 A：36点以上、B：14点以上、C：14点未満

緑色の下線は、A・B・Cで文言が異なる箇所。

両科目では、A基準とB基準の差のつけ方が異なっている。「数学C」では思考の深まりで差をつけ、「生物基礎」では評価項目を減らし、問いのレベルを変えている。それが教科・科目の特性によるものかなどを議論することは、評価の精度の向上につながる。

*図1・2とも学校資料を基に編集部で作成。同校では学校のウェブサイトにて全科目のシラバスを公開している。

は評価項目を減らし、問いのレベルを変えています(図2)。教科間でなぜそのような違いが生じているのか、話し合ってみるのです。それによって評価規準をより具体的な文言で表現することができるようになります。評価の精度が上がるはずで、鈴木 評価方法はどのような観点で比較すればよいでしょうか。

田村 どの場合で、誰が、何を、どのように評価しているかという観点で見比べてみましょう。そして、評価規準を適切に見取れる評価方法かどうか、確認します。評価の客観性を担保しようと定期考査などの評価方法を重視しがちですが、評価では妥当性と信頼性が重要です。学習指導要領やGDに基づくことで妥当性は担保され、教科に精通し、生徒をよく知る教師が評価することで信頼性は高まります。

勝田 担当教師が1人の教科では評価をブラッシュアップさせるのは難しかったのですが、教科間で学び合うことはできそうです。これからも、より適切な評価を目指して、試行錯誤していきます。



*2 同校の「数学C」と「生物基礎」のシラバスは、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。
<https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/> または右の2次元コードからアクセスしてください。





学校改革

生徒主体の教育活動に転換し、 自律的学習者を育む「教育先進校」へ

大阪府・私立常翔学園中学校・高校

1分
で分かる軌跡

国公立大学合格者数1000人（*1）という目標を達成した大阪府・私立常翔学園中学校・高校は、次の課題として生徒の主体性の向上を挙げた。創立100周年を2年後に控えた2020年度、自律的学習者を育む「教育先進校」を目指す学校改革に着手した。育成を目指す10のコンピテンシーと、その到達度を測る「学校ルーブリック」を策定。生徒主体の学校づくりを進め、『自主・自律』の精神を育んでいる。自律した組織づくりのための権限委譲や、教育データを踏まえた指導改善も行い、改革を加速させている。

#学校ルーブリック

#生徒主体の学校づくり

学校概要

設立 1922（大正11）年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 1学年約600人

2023年度卒業生進路実績

国公立大は、東北大、京都工芸繊維大、京都大、大阪教育大、大阪大、神戸大、大阪公立大などに85人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、大阪工業大、関西大、摂南大、関西学院大、広島国際大などに延べ3006人が合格。

* 1 防衛大、既卒生の合格者数を含む。



校長
田代浩和
たしろ・ひろかず
同校に赴任して38年目。



教育改革担当教頭
池田 弘
いけだ・ひろし
同校に赴任して18年目。教育
イノベーションセンター長。
キャリア教育担当。理科。



高校教頭
大谷 保
おおたに・たもつ
同校に赴任して35年目。英語
科。



教務部長
中谷元宣
なかたに・もとのぶ
同校に赴任して14年目。国語
科。



進路指導部長
尾崎俊江
おえき・としえ
同校に赴任して19年目。国語
科。



生徒指導部長
御堂 浩
みどう・ひろし
同校に赴任して28年目。保健
体育科。

変革の背景

**進学実績の目標は達成。
次の課題は主体性の向上**

2000年代、国公立大学合格者数が10〜20人だった大阪府・私立常翔学園中学校・高校は、地域有数の進学校を目指し、国公立大学合格者数100人以上を目標に掲げて学習指導や進路指導を充実させてきた。その結果、19年度以降、目標を達成する年が続いている。教師は指導の手応えを感じていた一方で、新たな課題に直面した。田代浩和校長は次のように説明する。

「当時の授業は講義型が大半で、学校行事などでも、教師が生徒に指示する場面がよく見られました。生徒の学力や進学実績は伸びたものの、教師が指示をしないと行動に移せない生徒が増えていました」
トップダウン型の学校経営が長年続いた影響か、新たな挑戦をする教師があまりないことも課題だった。「本校の教育理念は、『自主・自律』の精神の育成です。その原点に立ち

返り、これからの社会を自分の力で生きていける生徒を育てていくために、教育活動の指針や取り組み内容を見直さなければならなりません」(田代校長)

変革の一手①

学校ルーブリックで、育成を目指すコンピテンシーを共有

顕在化した課題に取り組むべく、20年度に学校改革に着手。まず、管理職や各コース長が中心となり、「どんな学校でありたいか」「生徒に育むべき資質・能力は何か」などについて、現場の教師と何度も議論した。そして、創立100周年を迎えた22年度、学校の将来像を「人々が幸福で平和に生きることができる世の中を創るため、生徒中心の教育を重視し、グローバルシチズンシップを身につけた自律的学習者を育成する教育先進校となる」と明文化。育成を目指すコア・コンピテンシーを「知的冒険心」「ヒューマニティー」「レジリエンス」とし、それらを細分化

した10のコンピテンシーと、それぞれの到達度を5段階で示した「学校ルーブリック」(P.42図1)を策定し、教育活動の指針とした。

各教科・科目では、学校ルーブリックを基に、「教科ルーブリック」と「単元ルーブリック」を作成。それらを踏まえた授業づくりができるよう、校内研修を充実させた。教育改革担当教頭の池田弘先生はこう語る。

「生徒間で自分の考えを伝え合うアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業形式で、教師はどのコンピテンシーを育むのかを意識し、生徒主体の授業をするようになってきています。また、月に1回、教科主任が集まり、どの学年のどの科目で、どのコンピテンシーを育成しているかを確認し、育成すべきコンピテンシーで足りない点があればどう補完するかを、教科・学年を超えて話し合っています」

生徒にも学校ルーブリックを提示し、それを基に自己評価をする機会を年2回設け、どんな力を身につけるために、どう行動すべきかを、生徒自身が意識できるようにしている。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

図1

「学校ルーブリック」(抜粋)

コンピテンシー	説明	S	A
		高校レベルを超えて特に秀でている 広い範囲でよい影響を与えることができるレベル	高校卒業時の到達目標 周囲により影響を与えることができるレベル
知的冒険心	①知識・技能を習得する力	身につけた知識・技能を、生涯を貫く教養にまで高めることができる	実社会で活用できる高度な知識・技能を身につけている
	②課題発見・解決能力	世界の問題や課題を進んで見つけ、周囲をリードしながら解決することができる	世界の問題や課題を進んで見つけ、当事者意識を持って解決しようとする姿勢がある
ヒューマニティー	⑤協調性・社会貢献	よりよい世の中を創るために、リーダーとして他者を導き、社会の役に立つことができる	よりよい世の中を創るために、他者とコミュニケーションを図り、社会の役に立とうとする姿勢がある
	⑥倫理観	よりよい社会を築くために、人として正しく生きる姿勢	他者を尊重し、よりよい社会を築くよう行動している
レジリエンス	⑨メタ認知	常に冷静に自己を客観視し、将来を見据え、高みを目指して行動することができる	自分の思考や能力を把握した上で現状を確認し、思考や行動を変えることができる
	⑩主体性	自分の意志で学び続ける精神	自分の意志で自分を高めようとする行動ができる

「知的冒険心」は4項目、「ヒューマニティー」は3項目、「レジリエンス」は3項目から成る。

※学校資料を基に編集部で作成。

図2

「常翔キャリアアップチャレンジ」(2024年度)

	1年次	2年次	3年次
一貫コースⅠ類	ガリレオプランⅠ	ガリレオプランⅡ	ガリレオプランⅢ
スーパーコース	<ul style="list-style-type: none"> SDGs研究 基礎研究 	<ul style="list-style-type: none"> 大学と連携した研究活動を行う人文・社会・自然科学の9つのゼミ 文化祭や研究発表会での発表 	<ul style="list-style-type: none"> 論文作成 サイエンスフォーラムでの発表
薬学・医療系進学コース			
一貫コースⅡ類	企業探究学習	ヤングリーダーズプラン	夢実現プラン
特進コース	<ul style="list-style-type: none"> 企業から出された課題を探究 	<ul style="list-style-type: none"> 即興ディベート 模擬国連 	<ul style="list-style-type: none"> 進路学習
文理進学コース		夢発見ゼミ	
		<ul style="list-style-type: none"> 社会課題探究 学園内大学講義 	

※学校資料を基に編集部で作成。

探究学習とキャリア教育を結びつけ、内発的動機を高める

同校は自律的学習者の育成のために、STEAM教育やグローバル教育など、多彩な教育活動を展開。中でも注力するのが探究学習とキャリア

ア教育だ。10年度に構築した、コースと学年に応じた「常翔キャリアアップチャレンジ」(図2)を毎年アップデートしながら今なお実施している。生徒は自分が問題意識を持っている課題に取り組み、問題解決力などを高め、キャリア観を深めている。

キャリア教育においては、生徒が持っている興味・関心を基に、大学で学びたいことや自分の将来像を熟考し、探究学習での学びが進路選択に生かせることに気づくような指導をしている。さらに、探究学習の成果を総合型選抜や学校推薦型選抜に生か

変革の一手②

校則変更や行事運営など、学校づくりを生徒主体に

でも成長し続けると考えています」

「以前は自分が将来何をしたいのかが分からず、入れる大学を選ぶ生徒がいましたが、今は探究学習で追究したことを大学でも学び続けたいと考えて進路を選ぶ生徒が増えています。高校3年間で『自主・自律』の精神を育み、自分でやりたいことを見つけて大学や学部を決めることができる」と、内発的動機が高まり、大学でも成長し続けると考えています」

生徒が学校づくりに参画する機会も積極的に設けた。22年度、「校則変更プロジェクト」を実施。まずは生徒会を中心に、校則を変える理由について話し合い、校則を1つずつ洗い出す中で、「生徒が安心・安全な学校生活を送るため」という校則の本質的な目的を再確認した。そして、教師や保護者、弁護士も入ったプロジェクトで対話を重ね、携帯電話の

使用ルールや、髪型の決まりの男女同一化など、複数の校則を変更した。そうした生徒主体の活動を通して生徒の意識が変化してきていると、生徒指導部長の御堂浩先生は語る。

「生徒会が全校生徒に呼びかけて、入学式や卒業式の企画・運営をするプロジェクトが進むなど、自分たちが学校をつくるという意識が生徒間に広がってきました。生徒会以外の生徒からも、体育祭や文化祭の改善などが提案されています」

また、放課後の自習時間「学習タイム」は、任意参加の日を増やした。高校教頭の大谷保先生はこう語る。

「以前は自習室で時間を過ごすだけの生徒もいましたが、今は部活動への参加やテスト前の自習など、すべき活動を自ら選んでいます。教師は『あと一時間頑張ろう』などと声をかけ、生徒の学習意欲を引き出すようにしています。自分の意思で参加するからこそ、『自主・自律』の精神に基づき学びになると考えています」

教師の意識変革も図ろうと、田代校長は自律型の学校運営への転換を宣言。上長から権限委譲し、教師が

自分で考えて行動することを推奨している。加えて、同僚性の向上や心理的安全性の確保も重視し、フィードバック面談等では管理職から教師に意見を聞くなど、教師同士が話しやすい職場づくりにも取り組んだ。

「職場の雰囲気は、管理職の態度に左右されます。教師からの『報・連・相』に対して、『怒らない』『否定しない』『助ける』『必要な時は指示する』といった『おひたし』の考え方で対話を心がけています」（田代校長）

変革の成果と展望

教育データに基づいた教育活動の改善を推進

学校改革の進展に伴い、多くの生徒が探究学習の成果を発表するコンテストに自ら応募したり、自分のやりたいことを自分で見つけて希望進路の実現に向けた学習に取り組んだり、自律的学習者を体現する姿が見られるようになってきている。また、学校ループリックによる生徒の自己評価において課題発見・解決力

や自己肯定感の評価が高まっていることも成果の1つと捉えている。

24年度には、教育データを活用して教育活動を改善する「IR（*2）プロジェクト」に着手した。それは授業評価や模擬試験の成績、大学入試の結果などを総合的に分析し、これまで見落としていた成果や課題を確実に捉えて教育活動の改善に生かす取り組みで、現在はデータの収集・整理を進めている。25年度からは本格的にデータの分析をする予定だ。教

務部長の中谷元宣先生はこう語る。

「学校が持っている様々な教育データを細かく分析すれば、例えば学習状況調査で家庭学習時間が少ないことが分かった生徒について、どのような要因があるのか、把握することができるようになるかもしれません。そしてそれが、個別最適な学びのより適切な支援へとつながればと思っています。エビデンスに基づいた教育活動の改善に取り組み、自律的学習者の育成をさらに推進していきます」

ベネッセが見た軌跡

新たな教育への挑戦

「人々が幸福で平和に生きることができる世の中を創るため、生徒中心の教育を重視し、グローバルチズンシップを身につけた自律的学習者を育成する教育先進校となる」—— 田代校長から学校の新しい将来像をお伺いした時、「常翔学園なら絶対にできる」と感じました。

地域有数の進学校として躍進を遂げながらも、新たな教育への挑戦を続け、自ら次の時代を切り拓いていこうとする力強さが、常翔学園の大きな魅力だと思っています。生徒中心の教育内容や学校行事、また学校内外を巻き込んだオープンな学校づくりなど、それぞれの取り組みもユニークかつ具体的です。本記事をお読みいただいた方に、その魅力が伝わっていましたらうれしく思います。

新たな教育を創られる先生方の挑戦を後押しできるように、引き続きご支援させていただきます！

(株)ベネッセコーポレーション大阪支社

大阪府・私立常翔学園
中学校・高校担当

岸田隆志



お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

*2 Institutional Researchの略。学校や生徒、教師など、学校にかかわるデータを収集・分析し、その結果を学校運営の計画・改善などに生かすこと。

目前に迫る2025年度大学入試に向けた 進路指導と学習指導のポイント

現行の学習指導要領に対応した初めての入試となる2025年度入試が近づいてきた。そこで、今号は生徒の希望進路の実現に向けた今後の進路指導と学習指導のポイントを、現高校3年生の志望動向や、高校教師を対象としたアンケート調査の結果を踏まえてお伝えする。

25年度入試を取り巻く環境を整理する

減少が続いていた18歳人口 25年度入試では増加

まずは、24年進研模試「大学入学共通テスト模試・6月」の分析結果を基に、25年度入試を取り巻く入試環境について整理する。

18歳人口は、23年度まで減少が続いていたが、24年度は約110万人となり、前年度から約2・5%増加すると予想される。だが、22年度以前の数値と比較するとおおむね低い水準にあり、23年度入試の時点で既卒生の減少による受験競争の緩和が進んでいたことも踏まえる

と、25年度入試において競争が極端に過熱するようなことは考えにくいだろう。

24年進研模試「大学入学共通テスト模試・6月」の受験者数は対前年指数102と、おおむね18歳人口と同程度の増加だ(図1)。国公立大学、私立大学の志望者数も、対前年指数102。また、私立大学志望者の内訳を見ると、一般方式が対前年指数101に対し、共通テスト方式が対前年指数106と、志望者数の増加が目立った。

教科型別の受験者数は、5教科型では文系の方が受験者数の対前年指数が大きかった(図2)。文系の対前年指数の

増加は、文系学部の人気が回復傾向にあることも要因として考えられる。新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが5類感染症に変更された影響もあり、24年度入試では語学・国際関係学系統の人気回復が見られていたが、今回の志望動向でも、国公立大学、私立大学ともに語学・国際関係学系統の志望者数が増加し、25年度入試でも人気の回復傾向が続くと考えられる。

同様に、社会学系統の観光学系統の志望者数の対前年指数が国公立大学で108、私立大学では109と増加しており、人気回復が続く可能性が高い。近年は理系学部の人気が高い傾向が続いていたが、今回の志望動向では、国公立大学、私立大学ともにそうした傾向は明確には見られなかった。

図1 進研模試「大学入学共通テスト模試・6月」受験者数・志望者数の推移

	受験者数	志望者数			
		国公立大学	私立大学	私立大学(一)	私立大学(共)
2024年度	409,210	840,669	1,502,955	1,058,247	444,708
2023年度	400,515	824,222	1,470,035	1,050,205	419,830
指数	102	102	102	101	106

図2 進研模試「大学入学共通テスト模試・6月」教科型別受験者数の推移

	教科型別受験者数					
	6-9 文系	6-8 理系	5-8 文系	5-7 理系	私文3教科	私理3教科
2024年度	103,498	127,208	109,603	130,935	212,266	163,907
2023年度	-	-	106,612	129,773	207,372	161,482
指数	-	-	103	101	102	102

※私立大学(一)は一般方式、私立大学(共)は共通テスト方式。※指数は前年度の人数を100とした時の数値。

「大学入学共通テスト模試・6月」における 志望動向から分かる、今後の進路指導のポイント

国立大学は「強気の志望」 に落ち着きが見られた

18歳人口の減少によって受験競争の緩和が進んだことで、近年は、難関大学への強気のチャレンジ志向が継続してきた。現高校3年生においても、2年次に受験した「大学入学共通テスト模試・2月」までは難関大学の志望者指数が高

図3 大学入学共通テスト模試・6月
国公立大学 志望動向

	志望者数		指数
	24年度	23年度	
国公立大学	840,669	824,222	102
国立大学	614,526	606,221	101
公立大学	226,143	218,001	104

	志望者数		指数
	24年度	23年度	
難関国立10大学	146,671	144,313	102
ブロック大学	182,307	175,489	104
その他の国公立大学	511,691	504,420	101

※難関国立10大学：北海道大、東北大、東京科学大、東京大、一橋大、名古屋大、京大、大阪大、神戸大、九州大。
※東京科学大の2023年度の値は東京医科歯科大と東京工業大の合算値。
※ブロック大学：筑波大、千葉大、横浜国立大、新潟大、金沢大、岡山大、広島大、熊本大、東京都立大、大阪公立大。
※総計は中期日程と独自日程を含む。

い傾向が続いていた。

しかし、3年生になって受験した「大学入学共通テスト模試・6月」では、私立大学の志望者指数は高い傾向が続いているものの、国立大学については強気の志望に落ち着きが見られた。具体的には、難関国立10大学の志望者数の対前年指数が102と、おおむね18歳人口と同程度の増加に落ち着いている(図3)。

そうした志望動向の変化が生じたのは、生徒にかかる共通テスト対策の負担が25年度入試から大きくなくなったことが理由として考えられる。中でも原則として6教科の受験が求められる国立大学では負担が大きくなりやすく、志望校の入試教科・科目を確認した結果、不安になった受験生が少なくないようだ。公立高校のある教師は、「新たに

課される『情報I』が、模擬試験で思うように得点できず、想像以上に対策に時間がかかると気づき、負担に感じている3年生は多い」と話す。

私立大学では難関大学の 志望者数が増加傾向に

一方、私立大学では、入試難易度の高い大学群ほど志望者数が増加する傾向が見られている(図4)。特に、共通テスト方式の志望者数の増加が顕著だ。それは、共通テスト対策を負担に感じた国立大学志望者が、併願校として私立大学を多めに挙げていることが推測される。また、公立大学については志望者数が増加しているが(図3)、それは共通テストの教科・科目数が国立大学と比較して少ないことが理由として考えられる。

25年度大学入学共通テストは、前年度からの変更点が多く、対策にかかる負担が大きい国立大学志望者が不安を感じるようになり、国立大学に比べると入試教科・科目数の少ない公立大学への志望変更を検討したり、私立大学の併願校を増やしたりする動きが見られていると思われる。そのため、今後の指導におい

図4 「大学入学共通テスト模試・6月」私立大学 志望動向

	一般方式			共通テスト方式			合計		
	志望者数		指数	志望者数		指数	志望者数		指数
	24年度	23年度		24年度	23年度		24年度	23年度	
私立大学全体	1,058,247	1,050,205	101	444,708	419,830	106	1,502,955	1,470,035	102
難関13私立大学を除く 私立大学全体	818,466	821,580	100	327,899	319,389	103	1,146,365	1,140,969	100
難関13私立大学	239,781	228,625	105	116,809	100,441	116	356,590	329,066	108
早慶上理	48,894	48,854	100	27,037	22,144	122	75,931	70,998	107
MARCH	103,387	98,713	105	53,293	46,492	115	156,680	145,205	108
関関同立	87,500	81,058	108	36,479	31,805	115	123,979	112,863	110

※早慶上理は、早稲田大、慶應義塾大、上智大、東京理科大の総称。MARCHは、明治大、青山学院大、立教大、中央大、法政大の総称。関関同立は、関西大、関西学院大、同志社大、立命館大の総称。
※指数は前年度の人数を100とした時の数値。

お勧めの分掌
管理職
教務担当
進路担当
担任

図5 大学・高専機能強化支援事業による入学定員の増加や学部の新設（抜粋）

大学	内容	入学定員の変更	備考
秋田大	情報データ科学部の新設	新設 100 人	理工学部 数理・電気電子情報学科 人間情報工学コース(32人)を募集停止。
筑波大	理工学群工学システム学類、情報学群(情報科学類、情報メディア創成学類)の増員	増員 280人→311人	
横浜国立大	理工学部数物・電子情報系学科 情報工学教育プログラムの増員	増員 47人→70人	
三重大	工学部総合工学科において、電子情報工学コース(仮称)の新設及び情報工学コースの増員	新設 40人 増員 65人→100人	工学部の情報系以外のコースを減員。 30年、32年に工学部以外の学部を減員。
滋賀大	データサイエンス学部データサイエンス学科の増員	増員 100人→155人	経済学部の減員。
神戸大	工学部情報知能工学科を改組し、システム情報学部システム情報学科(仮称)の新設	増員 107人→150人	
広島大	工学部第二類(電気電子・システム情報系)半導体システムプログラムの新設、情報科学部情報科学科の増員	新設 65人 増員 155人→200人	編入学定員(25人)を含む。文、法、経済、理、工学部第二類(電気電子・システム情報系)、生物生産学部を25年、27年に減員。

※大学改革支援・学位授与機構が公表した各大学の申請内容及び各大学が公表している25年度大学入学試験情報を基に編集部で作成。

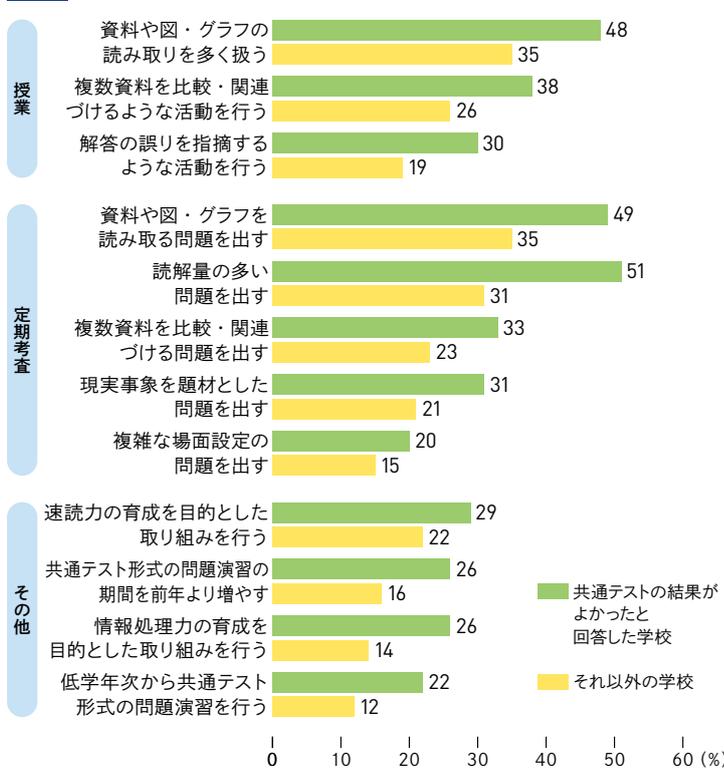
ては、生徒が過度に不安になって国立大学を早々に諦めたり、受験教科を絞ろうと安易に私立大学に志望校を変更したりすることがないように、併願校選びも含めて、出願パターンを戦略的に検討することが求められる。

また、近年の大学入試の特徴として、情報系の学部の新設・入学定員増加がある。文部科学省は、社会におけるデジタル化・脱炭素化をけん引する高度専門人材の育成を支援するために、「大学・高

専機能強化支援事業」を24年度より開始しているが、そうしたことを背景に、25年度入試でも情報系の学部の入学定員の増加が多く見られる(図5)。

入学定員の増加分をどの入試方式で募集するかは、各大学の入学者選抜要項で確認する必要があるが、増員があった募集単位については、入試難易度の変動が予想されるため、今後の動向に注目する必要がある。

図6 共通テストの結果別の学校の取り組み状況



※「新課程および教育活動全般に関する調査」(2024年3月実施)より。共通テストの志願者がいたと回答した700校のデータを集計。
 ※共通テスト全体の結果について「とてもよかった」「よかった」「どちらとも言えない」「悪かった」「とても悪かった」の5段階で回答。「とてもよかった」「よかった」と回答した学校を「共通テストの結果がよかったと回答した学校」、「どちらとも言えない」「悪かった」「とても悪かった」と回答した学校を「それ以外の学校」として集計した。

新課程及び教育活動全般に関する調査から分かる、今後の学習指導のポイント

24年3月、ベネッセ教育情報センターは、全国の高校教師を対象に、新課程及び教育活動全般に関するアンケート調査を実施した。

共通テスト対策として取り組んできたことのうち、共通テストの結果がよかったと回答した学校と、どちらとも言えない・悪かったと回答した学校で差がついた取り組みを分析したところ、定期考査で読解量の多い問題や、

資料や図・グラフを読み取る問題を出したり、授業において資料や図・グラフの読み取りを多く扱ったりする取り組みで差が見られた。また、授業や定期考査以外では、情報処理力の育成を目的とした取り組みを行う点で差がついていた(図6)。

共通テストでは、図やグラフなどを含む文章が、教科・科目を問わず問題の中で出される。そのため、生徒には、そうした問題に多く取り組み、読解力を高めることが求められる。そして、定期考査や校内実力テストにおいても資料や図の読み取り、複数資料の比較・関連づけを求める問題などを積極的に出していきたい。

複数の資料や題材を読み取る問題で差がついた

24年進研模試「大学入学共通テスト模試・6月」で差がついた問題からも、共通テスト本番に向けた学習指導のポイントが見えてくる。

例えば、「日本史探究」の第2問の問4は、正解率は62.1%で、各偏差値帯で正解率に差がついた(図7)。その問題では、教科書で学んだ基本

的な知識を前提として、資料で描かれている場面を把握する力が求められた。共通テストでは基本的な知識を活用して資料を読み解く問題が出されるため、授業でも様々な形式の資料を取り上げ、資料から読み取れる情報を素早く整理する力を身につけさせたい。

そうした指導ポイントは、教科・科目を問わず、共通のものと言える。例えば「物理」では、既知の実験結果を基に条件が異なる場合について考察させる問

題(第2問の問6)で、また「生物」では、問題文や図表、資料などから読み取れる情報を基に考察する問題(第2問の問6)で、いずれも正解率に差がついた。

前述してきた通り、複数の資料や題材、実験や考察の過程などから必要な情報を素早く読み取ったり、得られた情報と既習の知識を結びつけたりする力の育成が、今後の課題と言えるだろう。

図7 正解率に差がついた問題

問4 下線部④に関連して、次の資料7は磐井に関する「日本書紀」の記述の一部である。この資料7から読み取れることに関して述べた文あ～えについて、正しいものの組合せを、後の①～④のうちから一つ選べ。 13

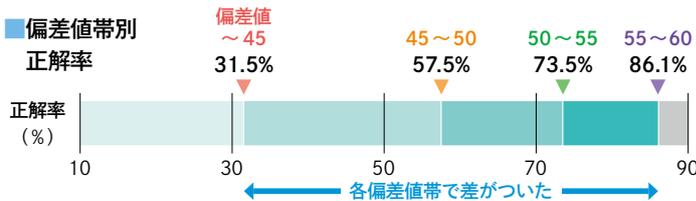
資料7
(継体天皇)二十一年夏六月壬辰朔甲午、近江毛野臣(注4)、衆六万を率て、任那に往かんと欲す。新羅に渡られたる南加羅・摩己吞(注5)を為復し興し建てて任那に合せんが為なり。ここにおいて筑紫国造磐井、ひそかに叛逆を謀りて…つねに間隙をうかがう。新羅、これを知りてひそかに貨船(注6)を磐井の所にやりて毛野臣の軍を防護せん(注7)ことを勤む。ここにおいて、磐井、火・豊(注8)の二国におそい畏りて、つかえまつらず。…
二十二年冬十一月甲寅朔甲子、大將軍物部大連彥火火、親ら猷の帥 磐井と、筑紫の島井郡に交戦ふ。…遂に磐井を斬りて、果して龜場(注9)を定む。十二月に、筑紫君葛子、父の罪に坐りて誅せられむことを恐りて、糟屋屯倉を獻りて、死罪贖はんことを求す。…

(注4) 近江毛野臣：ヤマト政權に属する近江地方の豪族。
(注5) 南加羅・摩己吞：それぞれ加耶諸國を構成する國をさす。
(注6) 貨船：賈船のこと。(注7) 防護せん：防衛止めること。
(注8) 火・豊：後の肥前・肥後國と豊前・豊後國に相当する領域のこと。
(注9) 龜場：境界。

あ 新羅と結んだ磐井は、朝鮮半島に渡ろうとするヤマト政權の軍を妨害した。
い 加耶諸國と結んだ磐井は、朝鮮半島に渡ろうとするヤマト政權の軍を妨害した。
う 磐井の子である葛子は、大王に糟屋の地を献上して死罪を逃れようとした。
え 磐井の子である葛子は、大王に誹謗したため糟屋を私有地として支配することを認められた。

① あ・う ② あ・え ③ い・う ④ い・え

第2問 問4
正解率
62.1%



※【地歴公民】「大学入学共通テスト模試・6月」の傾向とこれからの指導例を基に編集部で作成。
※差がついた問題は、各偏差値帯で差がついた問題、またはある偏差値帯を境に差がついた問題を総称している。

「大学入学共通テスト模試・6月」の結果を基にした指導例

https://bhsso.benesse.ne.jp/hs_online/info/shinken_moshi/doukou20240621_2

「大学入学共通テスト模試・6月」の結果から、今後のご指導にお役立ていただける教科別の指導のポイントを、Benesse High School Online に掲載しています。ぜひ、ご覧ください。

Benesse High School Online
高校の先生の課題解決をサポートする情報サイト

ハイスクールオンライントップページ>テスト・教材活用情報 > 進研模試 > 活用データ > 3年生・6月マーク式 > 受験後 共通テスト模試・6月 活用ポイント

お勧めの分掌
管理職
教務担当
進路担当
担任



今号で初めて表紙の取材を担当しました。写真は、私たち取材陣がロケハンでモデルを務めた際の1枚です。写真のように、校内の数か所で仮の撮影をして撮影場所の目星をつけた後、先生と生徒の皆さんにご登場いただき、本番の撮影を行いました。その時に驚いたのは、場所を変え、立ち位置を変え、何百枚も撮影したこと。その中から悩みに悩んで選んだ1枚が、今号の表紙です。

汗ばむ陽気の6月末、定期考査直後のところ、先生や生徒に何度も移動をお願いしましたが、皆さん、嫌な顔1つせず、和気あいあいとした雰囲気の中で撮影は進みました。先生と生徒の皆さんが過ごす、かけがえのない瞬間に同席させていただいたことを光栄に思いました。初めて表紙の取材をさせていただいた茨城県立境高校の木村先生と生徒の皆さんの素敵な笑顔の写真は、私にとって宝物の1枚です。(丸山)

VIEWnext公式アカウント

LINE@

友だち募集中!



『VIEW next』のLINEを友だち登録していただければ、本誌の発刊時や新コンテンツの公開時に通知が届き、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』内の該当記事に、ダイレクトにアクセスできます。この機会にぜひ、友だち登録をお願いします!

【友だち登録の方法】上の2次元コードを読み取っていただくか、LINEアプリの「友だち追加」>「ID検索」で「@view21」とご入力いただき、追加してください。

VIEWnext

高校版 2024年10月号

10月15日発刊

(予定)

『VIEW next』高校版は
年6回の発刊です。

Reader's VIEW

先生方からのご意見を
紹介します

2024年6月号へのご意見

重要なのは、生徒が確実に学力をつけること

6月号の特集の事例整理にあった、「定期考査の廃止は観点別学習状況の評価を充実させ、目標と指導と評価の一体化を図るための『手段』に過ぎない」という記述が、本特集のポイントだと思った。事例1の岩手県・私立専修大学北上高校の記事で、川村俊彦副校長が言われていたように、「大切なのは、生徒が確実に学力を身につけること」であり、学習評価はその手段の1つだ。勤務校では今年度から、定期考査を実施しないことが認められることになり、私は担当科目で1学期の中間考査を実施しなかった。単元の終わりに単元テストを実施し、その類似問題を期末考査で出題したところ、中間考査を実施していた時よりも学習内容の定着度は高いと感じた。2学期は単元テストをより充実させたいと考えている。

千葉県 匿名希望

単元テストは今の生徒に効果的だと感じた

6月号の特集の事例3の鹿児島県立鶴丸高校の記事に、「単元テストによって、生徒はスモールステップで自分の学習状況を把握することができ、その後の学習の進め方を改善するスパンが短くなる」とあった。最近の生徒は、日常生活において速いサイクルで「吸収」「消費」「還元」をすることに慣れていて、単元テストで学びを振り返ることは効果的であるように思えた。ただ、単元テストは、教師にとって生徒の学習状況を把握しやすいメリットがある一方で、何を身につけさせたいのかなど、目標や目的が曖昧だとテストが形骸化してしまう恐れがある。その点に留意する必要があると感じた。

静岡県立富岳館高校 松浦恵太

単元テストを好意的に受け止める生徒に驚いた

6月号の特集の高校生座談会の記事に、「(単元テストは)部活動も勉強も頑張りたい自分には、とても合っている」という生徒の発言があった。単元テストは、評価の比重が大きくない一方で実施回数が多いため、生徒は嫌がると思っていたが、意外にも単元テストを学習リズムのバロメーターとして、好意的に受け止めていることに驚いた。また、「先生の声かけは大きい」という発言もあったが、やはり私たち教師からの声かけは、生徒に大きな影響を与えるのだと改めて感じた。生徒に声をかける際には、言葉を慎重に選び、自分の思いをしっかりと伝えていかなければならないと、肝に銘じた。

東京都・私立東京農業大学第一高校 小堀健一

あえて待つ姿勢の大切さを実感

6月号の「先生なら、どうしますか?」の記事は、ウェブオリジナル記事を含めてじっくり読み、その内容に共感した。小・中学校時代に学校で傷ついた経験を持つ生徒に接する際、あえて待つ姿勢が必要であることを改めて感じた。彼らが教師を困らせたり、問題を起こしたりすると、彼らを責める教師の動きに同調しがちであるが、時にそれは生徒を大きく傷つけることにつながってしまう恐れがある。そうした生徒ほど困っているということを、心に留めて支援していきたい。

長崎県立波佐見高校 広井恒之

VIEWnext 編集部からのお知らせ

VIEWnext 高校版 創刊50周年記念セミナー

学校をどこへ、どう導くか

— 次代を創るリーダーシップとは

セミナーのアーカイブ動画視聴のお申し込みを VIEWnext ONLINE で受け付け中です

2024年10月31日(木)まで、お申し込み・ご視聴いただけます

弊誌 VIEWnext 高校版は、1974年に『進研ニュース』として創刊し、『VIEW21』、そして『VIEW next』と名称を変更しながら発刊を重ね、2024年8月に創刊50年を迎えました。それを記念して、「学校をどこへ、どう導くか — 次代を創るリーダーシップとは」と題したオンラインセミナーを2024年7月26日に開催しました。セミナーのアーカイブ動画は、2024年10月31日(木)まで、お申し込み、ご視聴いただけます。まだご覧になっていない方は、ぜひお申し込みいただき、ご視聴ください。

◎セミナープログラム概要

基調講演

セッション1

荒瀬克己先生

独立行政法人教職員支援機構 理事長、中央教育審議会 会長

「これからの高校教育と、管理職・ミドルリーダーに求められる役割と資質」について、中央教育審議会で議論・検討されてこられたことも踏まえてお話しいただきました。



荒瀬先生

特別鼎談

セッション2

岡田武史先生

学校法人今治明德学園 FC今治高等学校 里山校 学園長

五十嵐沙千子先生 哲学者／筑波大学人文社会系 准教授

川村俊彦先生 岩手県・私立専修大学北上高等学校 副校長

「魅力的な学校の実現に必要なリーダーシップと組織づくり」について、3人の先生方に、ご実践やご知見を踏まえて対話をいただきました。



五十嵐先生



岡田先生



川村先生

アーカイブ動画視聴のご案内・お申し込みはこちらから！

VIEWnext ONLINE セミナーの開催レポートも、同ページからご覧いただけます。

URL <https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article28750/>



生徒と創る学びの情景

話を聞かせて

茨城県立境高校 木村亜紀子 先生



担任から進路指導主事まで、どんな立場になっても木村先生が意識して行っているのは生徒との対話だ。同校での最初の授業では、1コマかけて木村先生と生徒全員が自己紹介を行った。清掃時間や自習時には生徒に声をかけ、学習や部活動、進路などの話を聞く。その時に大切にしているのは、生徒が「自分は頑張っている」と実感できるようにすること。定期考査などの答案の返却時には、点数よりも答案の内容に注目し、できている点を褒める。他者から認められることが人を動かす原動力になると考えるからだ。「生徒は皆、何かしらの思いを持っていますが、それを形にするには生徒自身が動くしかない。その後押しをしたい」と、木村先生は語る。

そんな木村先生は、生徒にとって、いつでも親身に話を聞いてくれる存在だ。成績が思うように伸びず、第1志望校を変えるべきか悩んでいた生徒は進路指導室を訪れ、木村先生から、「目標は目標のままでもいいんじゃない？ 自分の位置を確認して、目標までの距離をどう埋めるかを一緒に考えよう」と言われたことで、モヤモヤが晴れた。「目標が何かを改めて確認できて、志望校や入試方式を見直せた。後は頑張るのみ」と、その生徒は笑顔を見せた。木村先生はまた一つ、生徒の心に灯をつけた。

きむら・あきこ 同校に赴任して2年目。進路指導主事。国語科。

茨城県立境高校 1928（昭和3）年設立／全日制／普通科／共学／1学年約240人／2023年度卒業生進路実績 国公立大は、茨城大、筑波大、埼玉大などに8人が合格。私立大は、芝浦工業大、成蹊大、専修大、東洋大、法政大などに延べ272人が合格。短大・専門学校進学54人。就職15人。

お客様サービスセンター

フリーダイヤル **0120-350455** [受付時間] 月～金8:00～18:00/土8:00～17:00(祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17